学園黙示録 意思を継ぐ者

黄龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園黙示録　意思を継ぐ者

【Ｎコード】
Ｎ９５１７Ｒ

【作者名】
黄龍

【あらすじ】
そう……、あの３月１１日を境に世界は大きく変わった。奴らが人を喰らい、人が人を血で染める世界に……。
だが、俺達はこの世界で生きていくと決めた。だから俺達はこんな場所で奴らに成り果てる分けにはいかない。俺達は歩き出す、その先に何が待っているかは誰にもわからない、だが俺達は未来を掴むまでその歩みを止めることは無いだろう。
世界は新たな時代へ歩きだしたのだ。束の間の楽園から秩序を失った地獄へと……。

原作キャラは一応今年登場予定です。
２０１１年１２月３０日　世界観を一新しました。詳細は後ほど…。

プロローグ　３月２１日　午前４時３０分　イージス艦なぎさ作戦会議室（前書

とりあえずプロローグを書きます。イージス艦の中での三人の会話です。
ちなみに主人公はこの三人ではありません。

プロローグ　3月21日　午前4時30分　イージス艦なぎさ作戦会議室

２０１５年３月２１日午前４時３０分
床常沖４０キロ　イージス艦　なぎさ　作戦会議室

「何で上層部の人間は俺達に訳の分からない任務を押し付けるんだよ。上は俺達をバイオハザード専門部隊だと勘違いしてんのか？あくまでも俺達は多目的な部隊だ。そう思うだろ飛竜。」
全く、上の人間は俺達の練度が高いのをいいことに、こんな無謀な任務ばっか押し付けてきやがって。

「しょうがないだろ錬次、事態が事態だ。いくら自衛官でもあんな状況を見たら混乱する。それを考えたら冷静に対処できるのは対バイオハザードの実践経験がある俺たちだけだろう。」

「まあ、そう言われたらたしかにそうだけどよ。だがいくらなんでも俺達3人だけってのは少し無謀じゃないか、零次はこのことどう思ってる。」

「たしかにな、俺たち3人だけってのは確かに引っかかるな。まあ、俺たちだけの方がフットワークが良くていいだろ。」

「まあな。」

「さて、お喋りはこのぐらいにしてそろそろ真面目に作戦会議を始めるか。」
「ハイハイ」
「イェッサー」

「じゃあ初めるぞ。知っての通りスイスで発生した特殊なウイルスにより死者が生き返ると言う、まさに某ゾンビゲームのような事態が発生。一度は完全に鎮圧しウイルスの殲滅に成功したが一部のウイルスがテロリストにより持ち出された。」

「やはりあの時の奴等はテロリストだったのか。もしあの時、俺達が立ち向かってれば……」

「いやあの時は逃げるのが正しい選択だ。戦車が5両、ヘリが3機、あの状況では勝つ方が難しい」

「だが立ち向かってればこんな事態にはならなかったかも知れない。」

「過去を悔やむのは止めろ。過去は変えられない。」

「スマン……」

「話しを戻すぞ。そんで昨日そのウイルスが突然変異した。そんでなんか分からんが、ウイルスがまんまバイオハザード的な感じになったんだ。まあ幸いなのは噛まれないと死なないことだ。空気感染もしない。ただ…」

「噛まれれば間違いなくサヨナラか。だとしたら確かにまんまバイオハザードだな。もしくは某学園黙示録か、」

「まあウイルスのパターンとしてはバイオハザードだが生き返った死者のパターンとしては学園黙示録だな。」

「でここからが本題だ日本でこの異常事態が起きたのは1日前だ、幸いにもまだこの事態を国民は知らない。つまりはこの事態が大事となる前に何とかしてくれと言うお上からの命令だ。」

「要するに出てくる奴らをチマチマ撃ち殺せと言うことか。全く無茶な命令をするもんだ。」

「たがここで食い止めないと最悪、国が滅ぶぞ。」

「確かにな、初期の対応が遅れたスイスはそのせいで国家存亡の危機に立たされたぐらいだからな。」

「だがどう動くんだ、まさか、この船で陸に突っ込むのか？」

「そんな馬鹿な事を考えているのはお前だけだ。作戦としては、まず発生源である床主市は対処不能、よって床主は街に繋がる橋を爆破、主要な道路のみ残す。」

「つまり床主市は放棄するという事か。で俺達はどこへ行くんだ。」

「その通りだ。よって俺達は床主市から２０キロ離れた光坂市に出動する。あの地域はまだ比較的被害が少ない、まだ十分に対処が可能だ。」

「出動は何時だ。」

「２１日午前９時４５分だ。光坂市にはヘリで向かい１０時３０分に上空から降下する。」

「いいのか、昼間からライフル銃ぶっぱなして。一応サイレンサー

が付いてるが、それでも結構な音はするし、万が一撃ってるのが見つかったら間違いなく騒ぎになるぞ。」

「だか到着した頃にはもしかしたら、もう撃たないといけない事になるかもしれないな、今は感染拡大を防げる確率が高いがいつ最悪の事態になるかもわからん。」

「まあ、そうならないことを願うけどな。で、光坂市まではヘリで行くんだな。取りあえずもし降下地点に奴らがいたらヘリの機関銃かミサイルでミンチにするのか？」

「まあ、それは最終手段だな、極力怪しまれる行動は避けたい。」

「じゃあ主発まではまだ時間がある。俺はこのあと打ち合わせがあってまだ寝れないが、お前らは少し寝とけ。いざ任務が始まったら寝る暇がないかもしれないからな。」

「では解散！」

「了解！」

「イエッサー！」

ブロローグ　３月２１日　午前４時３０分　イージス艦なぎさ作戦会議室（後書き）

改めて読んで見たら結構読みづらかった……。何とかしないと……。
あと今回出てきたイージス艦の説明をします。（兵器の説明が一番の楽しみだった作者が勝手に作った。）
なぎさ型イージス艦護衛艦　一番艦なぎさ
説明
新世代のイージス護衛艦として２０１１年に就役した最新鋭のイージス護衛艦。
ちなみに同じタイプの護衛艦が三隻就役しており名前は、
一番艦がなぎさ、二番艦がゆうなぎ、三番艦があらなぎとなっている。
こんごう型より兵装が強化されたため排水量は大きくなっておりそのせいか若干トップヘビー気味である。
名前の由来は、ＣＬＡＮＮＡＤのヒロインの渚からつけました。
緒元・性能
全長　１７５ｍ
全幅　２３ｍ
深さ　１３ｍ
喫水　７ｍ
基準排水量　約８３００トン
エンジン　ガスタービン４基　２軸　出力１１０，０００ＰＳ
速力３２ノット
乗員３００人

主要兵装
イージス装置一式・ハープン対艦ミサイル×２・アスロック対潜ミサイル×２・ＶＬＳ×２・１２７ｍｍ速射砲×１・２０ｍｍ機関砲×３・三連装短魚雷×２・対空ＳＡＭ×４・ミサイルジャマー装置

一式

第１話　３月２１日　午前１０時５分　光坂市上空（前書き）

深夜に書き上げたので多分、誤字脱字多数です。
間違いあったら教えて下さい。

第1話　3月21日　午前10時5分　光坂市上空

午前10時5分光坂市上空

「オイ、どういう事だこれ、何がまだ国民は知らないだ、あの光景を見る限りは絶対バレてるだろ。」

「なあ高崎、あの様子だとまさにこの世の地獄だな、こりゃバレないよう射殺、どころじゃないよな。既に辺り一面奴らの海だな。てか錬次その銃どうした、どう見ても自衛隊の89式じゃあないよな。」

「ああこれか、こいつはAK74を魔改造したAK74俺仕様だ。ちなみに改造費で給料1カ月分吹き飛んだ。」
まあ実際もっと吹き飛んだんだが、確か3カ月分……。

「そういえば零次隊長さっきから黙り混んでどうしたんですか。」
まあ隊長が黙り混んでる時はかなりシリアスな時しかないからな。

「久しぶりだな…。この町に帰ってきたのは。」

「零次隊長、この町の出身だったんですか！」
以外だ、隊長が都会者だったなんて。

「まあこの町にはあまりいい思い出は無いんだかな、この町には散々弄ばれた……。」

「隊長……。」

「いや、何でもない今のことは忘れてくれ。」

「すいません隊長、なんか変なこと聞いてしまって。」

「高崎。このヘリ乗り心地なまらいくね。」

あー居たよ、空気読まないやつ。

「そりゃそうだろ。なんせ自衛隊で去年配備されたばかりの２４式ヘリコプターだからな。」

「確かこいつのベースはロシアのＭｉ２４だよな。」

「ああ確か改良点は兵員室を小さくしてヘリの最高速度を上げたんだよな。あと本家より大量の兵器を積めるんだよな。」

「さてどこに降下する。」

「隊長、随分現実的な事言うんですね。」

「いや、お前が夢観すぎなんだよ錬次。でどうする。まさか奴らの群れの中にダイブする訳にはいかないからな。」

「とりあえず、まず奴らの群れが居ない所を探してさっさと降りるってのはどうだ。」

「まあ、それが一番確実な方法だな。」

「じゃあどこか奴らが居なくて広いスペースがあると思う。」

「ショッピングモールの屋上は？」

「錬次、お前はバカか、仮に降下に成功してもショッピングモールの中に居る奴らの大群をどう潰すんだ。」

「いい案だと思ったのに……。」

「学校のグラウンドは？」

「高崎、確かにいい案だがそれは仮に奴らが学校まで到達してなければの話だ。もし到達されてればそれこそ最悪の状況だ。」

「つまり条件次第で状況が変わるって事だな。」

「まあ、そんな所だな。」

「じゃああそこの裏山なんてどうだ。」

「高崎、錬次が珍しく真面目な事を言ったぞ。気をつけろ。明日ミサイルが降って来るぞ。」

「零次隊長、まあ、ここは一番安全そうな裏山に降下しよう。」

「確かにそれが一番安全だな。よし裏山に降下しよう。」

「了解！」

「イェッサー！」

第1話　3月21日　午前10時5分　光坂市上空（後書き）

眠い、とにかく眠いです。
ただいま第2話執筆中です。
それでは良い夢を。

第２話　３月２１日　午前１０時１５分　光坂東高校（前書き）

この話に出てる奴のどっちかが、一応主人公の予定です。
それでは第２話いって見よー！

第2話　3月21日　午前10時15分　光坂東高校

3月21日午前10時15分　　光坂市立東高校

「おい、高砂また授業サボったのか。」

「五月蝿い、出ようが、出まいが俺の勝手だ。第一俺は、この町が嫌いなんだ。」
そう俺は、この町が嫌いだ。何一つ変わらない日常それが、いや、この町の全てが嫌いだ。

「馬鹿かお前は、お前このままだと間違いなく留年するぞ。町が嫌いなのはわかるが勉強とは関係ないだろ。」
こいつの事は昔から知っているがこいつは昔からこの町が嫌いと言っている。

「それより竜一、よくお前はあんな暇な授業に出席出来るよな。」

「高砂、お前よく暇な授業とか言えるな。てか、お前進路どうするつもりなんだよ。」
こいつ絶対、将来の事考えて無いだろ。

「んー、自衛隊にでもなるか。銃好きだし。」

「こいつ絶対バカだ。間違いなくバカだ。」
銃が好きで自衛隊に入るとか……。

「おい！竜一、あれみろ！」
何だあれは！人が人を…喰ってやがる……。ヤバいんじゃないのか

……。

「何だよ高砂、そんなにデカイ声上げて、また、可愛い娘でもいたのか。高砂は可愛い娘に目がないからな。どれどれ……。何だよ！あれ！」

俺は一瞬で高砂がなぜデカイ声を上げたのか、その意味がわかった。いやあの光景を見たら声を上げない奴はいないだろう。

「人が、人を、喰ってやがる……。」

ここはこの世なのか、俺は目を疑った。食人は人類のダブーの一つだ。まともな奴はまずそんな行動に走らないだろう。

「なあ龍一、人間ってあんなに傷だらけで生きれるか？あれとか心臓がなくなってるんだが。」

まあ、まず人間心臓なくなってたら、死んでるか。

「高砂、お前はつまり死者が生き返って、その死者が生きてる奴を喰ってるって言いたいのか？」

さすがにそれだけは信じたくなかった。もしそんな事になったら、それこそバイオハザードや学園黙示録みたいな世界になったって事になる。

「信じたくないが、その通りだ。逃げるんならさっさと逃げよう、グラウンドにいた奴は全員あれの仲間になってるぞ。」

まさか、奴らが校内に侵入してまだ5分と経ってないんだぞ。なのに奴らはグラウンドにいた奴を全員喰ったのか……。

「高砂！悩んでる暇は無いぞ！奴らの一部が校舎内に侵入したぞ！」

マズイ、最悪の状況だ。奴らが校内に侵入した以上、戦闘は避けられない。

その時、校内放送がなった。
「生徒の皆さんに連絡します。只今グラウンドで危険な集団が暴れています。生徒の皆さんは教室に待機して、先生の指示にしたがっ……。」
その時、放送から断末魔が響いた。
「君たち何なんだ、バカな事は、なっ、何を、痛い！止めてくれ！死にたくなっ　アァァーー……」
「竜一、マジでヤバくないか……。」
「ああ確かにヤバい。なあ高砂、放送室は二階だったよな。」
「そうだが、何か？」
「何じゃねえよ！つまり奴らの群れが既に二階まで来てるって事だよ！」
「じゃあどこに逃げるんた！ここにも直に奴らが来る。」
もしここに奴らが来たらそれこそ俺たちに勝ち目はない。要するに喰われた挙げ句、奴らの仲間入りだ。
「高砂、屋上に逃げるぞ。確か屋上に天文部の部室があったよな。確かあそこにはパソコンがあったはずだ！」
確か屋上に繋がる扉は鉄製だったはずだ。そうだとすれば、そう簡単には破られないはずだ。
「了解だ！とその前に登って来てる奴らを倒しますか。」
そこには既に5・6体の奴らがいた。幸いにもまだ気付かれていない。

「なあ竜一、絶対に死ぬなよ。」

「高砂、お前もな。」

「行くぞ！」

第2話　3月21日　午前10時15分　光坂東高校（後書き）

高砂　「おい、作者。」

作者　「何っ、何だ。」

高砂　「なぜ前回兵器解説をやらなかった。」

作者　「イヤー前回書き上げたのが深夜だったから眠くてまた今度やればいいやと、思ってね。」

高砂　「ならいまから解説しろ。」

作者　「ああ、また今度な。」

高砂　「よし！作者に宿題だ。明後日までに前回やる予定だった、兵器解説をやれ」

作者　「気が向いたらな。」

第３話　３月２１日　午前１０時３５分　光坂市　裏山　坂の途中（前書き）

だいぶ遅れました。第３話です。

第3話　3月21日　午前10時35分　光坂市　裏山　坂の途中

「よし！全員降りたな。」
「おう！」
「降りたぜ！」

「じゃあパイロットさん、ミッションが終わり次第無線で連絡するから、そんときはすぐに来てくれよ。」

「了解。中国とかがバカやらかさない限りは行くから安心しろ。」

「もしかしてもう中国が動いたのか？」

「ああ、零次さん、今は動いてないが時期に動くだろう。いざあの国が核を撃ったとしたら、間違いなくうちのイージス艦はミサイル迎撃の為に日本海に向かうだろう。」

「つまりあんたは、俺たちが生きて帰れるタイムリミットは中国がミサイルを撃つまでと言いたいのか？」

「ああ、ご名答、まさしくその通りだ。」

「ところで俺たちこんな場所で時間食ってていいのか？」
錬次が二人の会話を割るように話してくる。やっぱりこいつは空気が読めないと思いつつ、後ろを振り替えると俺はその意味を理解した。
やつらがこちらに向かってきているのだ。しかも団体さんで。

「確かにお前の言う通りだ！隊長、会話もいいですけど早く行きま

しょう。もうヘリの音に気づいた奴らがこっちに向かって来てます。」

「ああたしかにお前らの言う通りだな。あの団体さんの数だと俺達はここでゲームオーバーだな。二人共いますぐ退却するぞ！」

「だが退却すると言ってもどこに……」

高崎が珍しく弱気になっている。まあこんな光景を見て弱気にならないやつはいないか。

「とりあえず住宅地に逃げよう。恐らくこの時間帯なら人気はないはずだ。」

「分かった俺は隊長を信じる！」

やっぱり隊長は格が違う。そう思った高崎であった。

「なあこのヘリの武装であの奴らの団体さんを潰す事は出来ないか？」

錬次が隊長に提案した。

「確かにいけるかもしれんな。隊長どうですか？」

錬次の案は確かにいけるかもしれない。いや、いけるはずだ。このヘリにはＭ１３４ミニガンが２つもついている。それだけじゃない、ロケット弾に対地ミサイル、いけない方がおかしい。

「わかった。確かに行けるかも知れない。パイロットさん、あの群れにありったけのミサイルと鉛弾食らわせるんだ」

万が一あそこにいる奴らを吹き飛ばせればかなり住宅街までの道が近くなる。

「零次、わかったぞ！あそこの奴らにありったけのミサイルを食らわせてやる。準備ができたら教えてくれ！奴らを灰にしてやる。」

「よし！聞いたなお前ら作戦変更だ！まずヘリが邪魔な奴らを灰にするから俺達はその隙をついて奴らの群れを突破するぞ。」

「了解！」

「任せろ！」

「準備ＯＫだ、始めてくれ！」

零次が叫ぶ。

「了解。じゃあ始めるぜ！対地ミサイル、全弾発射ーー！」

ヘリからミサイルが発射され、それまでこちらに向かって来ていた奴らを一掃する。

「おいおい、こりゃちょっとグロ過ぎないか。」

ミサイルが当たった奴らは勿論のこと、爆風を浴びた奴らも皮膚が焼けた奴もいれば体がバラバラになった奴もいた。

「おい、お前ら、多分この先見る光景はこれの比じゃないほど酷いものかもしれない。それでもついてくるか。」

零次が二人に問う。

「ああ、すでに覚悟は決めていた。」

先に錬次が答える。

「俺もだ、隊長。こうなる事は予想していた。」

少し遅れて高崎も答える。

「わかったぞ、二人とも付いてこい！残った奴らを潰してあの坂を強行突破するぞ！」

「おう！」

「任せとけ！」

こうして俺達のサバイバルは幕を開けた。

第３話　３月２１日　午前１０時３５分　光坂市　裏山　坂の途中（後書き）

何とか書き終えました。
時間が欲しい。
ヘリの解説は次こそ書きます。

只今第４話執筆中です。

番外編　人物紹介（前書き）

久々の投稿です。

番外編　人物紹介

人物紹介
とりあえず紹介しときます。

高原　零次
２９歳　５月３日生まれ　１８１ｃｍ　８２ｋｇ　所属　日本国海上自衛隊

ステータス評価
全体的にバランスがとれており比較的クセがない。どちらかと言えば格闘戦より銃撃戦の方が得意。

体力　★★★★★
精神力　★★★★
攻撃力　★★★
防御力　★★★★
スピード　★★★
持久力　★★★★★
瞬発力　★★★
頭脳　★★★★★

装備品

メイン武器　Ｈ＆Ｋ，ＭＰ５　装弾数３０（残弾２１５発）
サブ武器１　ワルサー，Ｐ９９　装弾数１５（残弾５５発）
サブ武器２　手榴弾（１０個）
アイテム

ＭＰ５用マガジン×１０、ワルサーＰ９９用マガジン×５、対ウイルスワクチン×３、食料（３日分）、水、通信機、ナイフ、羽のペンダント

今回の事態を鎮圧するため光坂市に派遣された海上自衛隊、第３艦隊の精鋭部隊、通称「ブラドー隊」（正式部隊名第６小隊）の隊長。階級は二曹。

なぜ、海上自衛隊が陸上作戦をやっているかと言うと偶然にも第６小隊が別の地方で起こった似たような事件に遭遇し、見事解決した経験を買われ送り込まれた。ポジションは後衛、近接戦を得意とする。

性格はかなり冷静沈着で滅多にキレることはないが一度キレると誰もてがつけられなくなる一面がある。尚、かなり黒い過去がある。

井坂　錬次

２６歳　８月１４日生まれ　１７８ｃｍ　７５ｋｇ　所属　日本国海上自衛隊

ステータス評価

体力と攻撃力が高く格闘戦向きだが銃撃戦も可能。ただあまり賢くないため頭脳戦には向かない。

体力　★★★★★
精神力　★★★
攻撃力　★★★★
防御力　★★★
スピード　★★★★★
持久力　★★★★★
瞬発力　★★★★★

頭脳　★★

装備品

メイン武器　ＡＫ－７４　装弾数４５（残弾１７０発）
サブ武器１　オート９　装弾数２０（残弾７０発）
サブ武器２　スコーピオン×２　装弾数２０（残弾２８０発）
アイテム
ＡＫ－７４用マガジン×７、オート９用マガジン×５、スコーピオン用マガジン×２０、食料（３日分）

ブラドー隊の隊員、階級は三曹。ポジションは弾幕を生かしての前衛。とにかく銃をぶっぱなすのが大好きでよく発砲事件を起こすブラドー隊のトラブルメーカー。ただ近距離での銃撃戦では天才的な才能を持っており、その才能でチームの危機を度々救ってる。ミーシャとはかなり打ち解けている様子で零次曰く、かなりいい感じらしい。

高崎　飛竜
２３歳　３月１１日生まれ　１７５ｃｍ　６９ｋｇ　所属　日本国海上自衛隊

ステータス評価
体力、精神力がやや高く持久戦にむいている。なお頭脳戦では最高クラスの能力を持っている。全体的にバランスがとれている。

体力　★★★★★
精神力　★★★★
攻撃力　★★★★

防御力　★★★★
スピード　★★★
持久力　★★★★
瞬発力　★★★
頭脳　★★★★★★

装備品
メイン武器　フランキＳＰＡＳ－１２　装弾数８（残弾７０発）
サブ武器１　コンバットナイフ
サブ武器２　ＦＮ　５－７　装弾数２０（残弾７５発）
アイテム
１２ゲージショットシェル×９５、グレネード弾×１８、ＦＮ　５－７用マガジン×７、食料（３日分）、水

ブラドー隊の隊員。階級は三曹。ポジションは大火力を生かしての前衛。
映画が大好きで彼の部屋には古今東西の映画のＤＶＤ（ブルーレイ）がありその数は楽に１００を越える。
映画（ターミネーター２）が好きで使用する銃火器までターミネーター２で統一している。
なお、かなりのアニメ好きでもあり部屋には大量のフィギュア（錬次がよく壊す）がある。
ミーシャとはたびたび揉めているが戦闘に関しての実力は認めている。

糸魚川　高砂
１６歳　４月１日生まれ　１５８ｃｍ　４８ｋｇ　所属　県立光坂高校

ステータス評価

見たまんまの頭脳戦向き。異常なまでの交渉力は軍人相手でも対等な交渉が出来る程。格闘戦には向かない。

体力　★★★
精神力　★★★★★
攻撃力　★★★
防御力　★★★
スピード　★★
持久力　★★
瞬発力　★★
頭脳　★★★★★

装備品
メイン武器　コイルガン（タイプ、スナイパーライフル）装弾数１０　（残弾１００発）
サブ武器１　サバイバルナイフ
サブ武器２　特製打ち上げ花火　装弾数１（残弾２発）
アイテム
水　コイルガン用マガジン×５　コイルガンの弾×１５０　打ち上げ花火の予備弾×２

県立光坂東高校の学生。（２年生）
サボり魔だが学力は学年トップクラス。今回の事態にいち早く気付き親友である竜一とともに屋上に避難した。彼の非常事態への対処能力は高く、いち早く的確な対処をした。
凄惨な体験をしており、そのせいか軍人にも劣らない程の精神力を有してる。

笠木　竜一

１６歳　６月２９日生まれ　１７２ｃｍ　６３ｋｇ　所属　県立光坂高校

ステータス評価
非常にバランスがとれているオールラウンダー。格闘戦にも銃撃戦にも向いている器用なポジション。

体力　★★★★
精神力　★★★
攻撃力　★★★
防御力　★★★
スピード　★★★
持久力　★★★
瞬発力　★★★
頭脳　★★

装備品
メイン武器　改造ロケット花火ガン（タイプ、アサルトライフル）
装弾数３０（残弾２４０発）
サブ武器１　木刀
サブ武器２　なし
アイテム
水　連射式改造ロケット花火ガン用マガジン×５　改造ロケット花火３００発

県立光坂東の学生（２年生）。
かなりバカな事をやりそうな性格だが以外と根は真面目。だが成績はあまり良くない、だが運動は得意で学年トップの身体能力を誇る。ちなみに屋上へ避難するさいに奴らと戦ったのはほとんど竜一。尚、趣味は武器の自作。尚、風紀委員会所属。だが後輩からの支持は薄

い。親はどちらとも海外に居る。

高嶺　麗奈
１６歳　８月８日生まれ　１６１ｃｍ　●●ｋｇ（体重の部分のみ何故か焦げている）所属　県立光坂高校

ステータス評価
全体的に身体能力が優れている。ポジションはアタッカーとサポーターとの中間、要するにオールラウンダー。ただし長期戦には弱い。

体力　★★★
精神力　★★★
攻撃力　★★★
防御力　★★
スピード　★★★★
持久力　★★
瞬発力　★★★★
頭脳　★★

装備品
メイン武器　コイルガン（タイプ、サブマシンガン）装弾数２０（残弾３００発）
サブ武器１　コイルガン（タイプ、ハンドガン）装弾数８　（残弾１２０発）
サブ武器２　ナタ
アイテム
単発式改造ロケット花火ガン用マガジン×１０　改造ロケット花火３００発　コイルガン用マガジン×５　コイルガンの弾×３００

光坂高校の学生（２年生）。
陸上部所属、生徒会副会長、生徒会の中では唯一の生存者、事件が起きた際にまっ先に生徒会室から抜け出したことにより難を逃れた。
（抜け出して数分後に生徒会はなだれ込んだ奴らによって全滅）向け出した際に生徒会とはかなり争った。竜一とは若干の面識がある。
（委員会関係で）性格は基本的に凶暴だが根は優しい。

美琴　神奈
１５歳　５月１８日生まれ　１５７ｃｍ　●●ｋｇ（汚れて見えない）所属　県立光坂高校

ステータス評価
全体的に能力が低い、ただ弓をもの凄くうまく扱えるので後衛ではかなりの力を発揮できる。ポジションは後衛。

体力　★★★
精神力　★★★★
攻撃力　★★
防御力　★★
スピード　★★
持久力　★★★
瞬発力　★★★
頭脳　★★★★

装備品
メイン武器　弓　装弾数１（残弾２５発）
サブ武器１　ボウガン　装弾数５（残弾４５発）
サブ武器２　なし
アイテム　弓用の弾×５０　ボウガンの弾×７５

光坂高校の学生。（1年生）
和服が似合う幸運美少女、その萌属性は数知れない。今回もその運の良さで生き残った。弓道部所属でその腕前はトップクラス。恐らくその腕前は中距離戦であれば銃とほぼ同格の頼もしさを持つ。麗奈とは面識がなく逃げてる際に偶然出会った。性格は基本大人しいが起こると誰よりも怖い。尚、ブラドー隊の高崎とは従兄妹である。

碓氷　秋名
１５歳　４月７日生まれ　１６２ｃｍ　４８ｋｇ　所属　県立光坂高校

ステータス評価
バイオハザードや銃の知識に詳しく一応銃も扱える。ただ戦闘では後方から自作のメカでのサポートがメイン。

体力　★★★
精神力　★★
攻撃力　★★★
防御力　★★
スピード　★★★
持久力　★★★
瞬発力　★★★
頭脳　★★★★

装備品
メイン武器　バット
サブ武器１　武装ラジコンヘリ　（改造ロケット花火×８　両翼に４連装ベイを２機搭載　小型火炎瓶×４）

サブ武器２　なし
アイテム
小型カメラ×３（ラジコンヘリに搭載）　改造ロケット花火×２４（ラジコンヘリ用）
小型火炎瓶×１２（ラジコンヘリに搭載）

光坂高校の学生（１年生）
バイオハザードなどの知識も豊富で今回はその知識を活かして生き延びた。メカに非常に強い。本人曰くこのような自体を想定して武装ラジコンヘリを制作したらしい。尚、かなりのオタクであり、そのせいか武装ヘリは痛ヘリと化している。ちなみに、彼は変態という名の紳士である。

ロランス・ミーシャ
１７歳　９月１１日生まれ　１６０ｃｍ　●●ｋｇ（破れている）
所属　ダークネス帝国軍

ステータス評価
高い戦闘センスを持っておりほとんどの銃火器を使える、能力的には、錬次のステータスをより戦闘的にした感じ、怒りの沸点が低いのが偶に瑕。ポジションは前衛

体力　★★★★★
精神力　★★
攻撃力　★★★★★
防御力　★★
スピード　★★★★★
持久力　★★★★
瞬発力　★★★★★

頭脳　★★

装備品

メイン武器　Ｍ１０イングラム×２　装弾数３２（残弾１３１発）

サブ武器１　Ｍ７９グレネードランチャー　装弾数１（残弾１２発）

サブ武器２　ジグＰ２２６　装弾数１３（残弾３４発）

アイテム

Ｍ１０イングラム用マガジン×６　ジグＰ２２６用マガジン×５

食料２日分

突如ブラドーを襲った少女。高い戦闘能力を誇り特に格闘に優れている、その格闘戦能力は格闘戦ではブラドー隊Ｎｏ１の実力を持つ錬次持ってしても、彼女があと数年実戦を経験していたら歯が立たなかったと言われるほど。

ちなみに彼女は普通の人間ではない。その証拠として銃弾を何十発受けても瞬時に回復させるほどの再生力を持つが、代償として再生力を使えば使うほど寿命が縮まる。

番外編　人物紹介（後書き）

人物設定にはかなり熱が入りました。

第４話　３月２１日　午前１０時５０分　光坂東高校　屋上（前書き）

やっと書き上げました。

第４話　３月２１日　午前１０時５０分　光坂東高校　屋上

俺達は今、屋上に居る。
なぜかって、それは動く死体が人間を食ってるからさ。
てか、なぜ屋上かって？
それはとりあえず屋上に繋がる階段は一ヶ所しかないし、更に屋上のドアは鉄製で簡単には破られないからだ。

「高砂、読者への説明はいいから早く武器になりそうなものを探せ！」
ここのドアは鉄製だから恐らく破られる事はないだろうが武器になりそうなものはあった方がいいからな。

「万が一破られる事があったら戦う以外の選択肢が無いことぐらい分かってるわ！」
竜一の言っている事は間違っていない。さっき屋上に居た奴らと戦ったが、奴らは動きは鈍いが力が異常だ。
安全を考えると、奴らと戦うときは極力素手での戦闘は避けたい。

「高砂、奴らは何を感知して襲ってくるか分かるか？」

「恐らく音を探知して追っかけてる筈だ。さっき戦った時、何体かは俺達に気が付いてなかったからな。恐らく奴らは目が見えないはずだ、目が見えてたら全部の奴らが俺達の方へ向かって来たはずだ。」
同様に熱探知などもない。

「竜一、もし生存者が居たらどうする？」
とりあえず生存者は助けておいた方がいいな、このような場合は仲

間は多い方が生存率は格段に上がる。

「なるべく助けたいがな。まあ、敵が未知の生命体な以上、下手に救助しようとすれば俺達も奴らの仲間入りだからな。」
勿論、俺だって助けれるなら助けたい、だが無闇に助けようとすれば俺達は死ぬ事になる。

「じゃあ高砂、救助が可能な状態の場合のみ救助といこうか。」
まあ、この際ある程度は他人を見捨てる覚悟は必要だ。

「確かにそれが一番合理的だな。てか竜一、武器になりそうなものは見つかったか？」

「ああ、だがあまりいいものはないな。見つかった武器になりそうなものと言えば、鉄パイプが3本、木刀が1本だけだ。」
実際、鉄パイプや木刀が戦闘において役に立つかと言うとＹｅｓと言えばその通りでありＮＯと言えばその通りでもある。
そして今回の用な場合は大体Ｙｅｓである。
奴らは飛び道具をもっておらず、さらに動きも鈍い。噛まれないよう気を付ければ鉄パイプや木刀でも十分に対処可能である。

「まあ、武器は無いよりある方がましだな。」

「高砂！ヤバいドアの向こうに奴らがいるぞ！」
マズいな奴ら、予想以上に侵攻速度が速い…。

「竜一！嘆いてる暇があったらドアの補強をするぞ。」
幸いにもまだドアは僅かに形が歪んでるだけで補強も可能だ。

「わかった！高砂は引き続き武器になりそうなものを探してくれ。

その間に俺がドアを補強する。」

「わかった！なるべく急いでくれよ。」

第４話　３月２１日　午前１０時５０分　光坂東高校　屋上（後書き）

疲れた…ただ疲れた…。

第5話　3月21日　午前11時30分　光坂市　住宅街西地区

「マジかよ……。ここも奴らの大群だ。」
これで奴らに足止めされたのは13回目だ。しかしこいつら町の中心部に行けばいくほど数が増えてやがる。

「零次、どうする？このままだったら何時までも町の中心部に行けないぞ。」
クソッ、政府の上層部は何でもっと早く俺たちを動かさなかったんだ！こうなることは18年前の一件でわかってたはずだぞ。

「隊長、下水道を通る手は使えませんか？」
いくら奴らでも下水道までは来れないはずだ。まあ、そういう所に限り奴らより強い奴が出てくるんだよ、例えばリッカー的な奴とか。

「高崎！後ろだ！避けろ！」
「クソッ！」

「大丈夫か！」
「とりあえずな、まあ、錬次が気付かなければ今頃ミンチになってたけどな。それよりヤバいんじゃねえかあれ」

高崎の5m程後ろには普通の奴らよりサイズがかなりデカイ奴が一体立っていた。しかし、そいつの手には巨大な棘のような物が生えており、背中からは触手が生えていた。
恐らくさっきの攻撃はあの触手から繰り出されたものだろう。

「なんだあれは、どう見てもタイ〇ント的な奴にしか見ないんだが。」

「隊長、悪い冗談はやめてくれ。あれが本当にタイ〇ント並みの戦闘能力があったらマジでヤバいから。」

「高崎も零次も話してる暇があったら頼むから撃ってくれ！特に高崎！ＳＰＡＳがあるんならはよ撃てよ！なんかあいつやたら硬いぞ、弱点の顔を撃ったが効いてる気配がない！恐らく俺の持ってる銃じゃ戦うだけ弾の無駄だ。」

「隊長、どうやら悪い冗談が当たったみたいだな。」

「ああ、間違いない。確かゲームだと最後はロケランを使って倒したはずだよな。まあ俺は、ロケランを使わないで倒したけどな。」

「零次！自慢話は後で聞くからいまはあれを何とかするぞ。あいつ、かなりキレてやがる。」

「錬次、高崎！奴に波状攻撃を仕掛けるぞ。錬次は弾幕で奴の気を引け！高崎は奴が錬次に気を取られてる所に集中攻撃を仕掛けろ！敵がデカい隙を見せたら俺が一気にとどめを刺す！」

「承知した！」

「任せろ！」

「全員攻撃開始！絶対に勝つぞ！」

零次の指示と同時に敵への波状攻撃が始まった。

「くらえ！化け物め！俺のツインスコーピオン攻撃を！」

錬次が二挺のスコーピオンで強力な弾幕を張り敵の気を引きつける。

強力な弾幕の前にさすがの強敵も僅かだが隙を見せる。
その僅かな隙を確実に見逃さず高崎がＳＰＡＳで追い打ちをかける。
「いくらタフな体を持っていても、隙を見せている所に軍用ショットガンを喰らったらタダではすまねんじゃねえのか。」
そう言い放つと高崎が敵に向かって容赦なくショットガンを放つ。
高崎の言う通りショットガンの連撃を受けた敵はかなりのダメージを受けており、もうすぐ倒れそうな状態である。
「隊長、今です！敵が膝をつきました。今がチャンスです！」
「ああ、後は任ろ、食らえ。化け物。」
そう言った瞬間、零次が風の様な勢いで敵に向かっていった。
「遅い。」
零次がそう言い放った時には既に敵の首は地面に転がっていた。

第６話　３月２１日　午後０時０５分　光坂高校　四階　実習棟（前書き）

久しぶりの投稿です。

第６話　３月２１日　午後０時０５分　光坂高校　四階　実習棟

「何でわざわざ実習棟なんかに来んだ？屋上なら何とか奴らをやり過ごす事も出来たかも知れないのに。しかもあんな危ないやり方で良く入ろうとしたよな。一歩間違ったっら間違いなくあの世行きだぞ。もしかして実習棟が俺たちがいた場所の真下に有ったのをいいことにアクション映画的なことをやりたいからわざわざ窓を破って入ったのか？そうだったらシバくぞ。」

そう、話は２０分程前に遡る。

午前１１時４５分　屋上

「高砂、ここから降りれば実習棟に行けるよな。」

「竜一、とうとう頭がおかしくなったか。まあ、俺は前々からコイツはヤバイなと、」

「高砂、お前こそ常識に囚われすぎなんだ。第一こうなった以上、今までの常識は全く通用しないのはお前が一番良く知ってる筈だろ。」

「まあ、竜一お前の言いたいことはよく解るがだが、屋上からラベリングは無いだろ。第一俺たちはどこかの国の特殊部隊でも無いんだしよ、仮にそんな事やっても死ぬだけだぞ。」

「なら他に打開策があるのか？」

俺もこの世界が今まで通りのマトモな世界ならこんなことは考えないでもっとマトモな方法を選ぶだろう。だが、こんな世界になっ

た以上、今までの常識は全く通用しない。

「そう言われたら言い返せねぇよな。」

「それなら行くぞ高砂。男は度胸！気分はジャッキー・チェン！」

「ちょ、おまっ、俺はまだ飛び降りるなんて一言もっ、てか、お前イイこといっときながら、結局ぅぅぅぅてか死ぬぅぅぅぅぅーー！」

そして再び今に戻る。

「まあ、半分はアクション映画的な事を、おっ、おいまだ理由はちゃんとあるから、だから鉄拳制裁はやめてくれ！」

制裁中、しばらくお待ちください……。

5分後、そこには瀕死の竜一が居た。

更に5分後

「だから、ここに俺は前々から色々な武器を隠してたんだ。こうなることを前々から予想してな。」

「竜一、嘘バレバレ、9割はお前の趣味だろ。」

「まあいいじゃん、これで俺たちの生存率が格段に上がったんだから。ほらこれ、釘打ち機、もちろん改造済だぜ。」

「チッ、しゃーないな、これでさっきの件はチャラにしてやるか。しかし、よくこんなもんまで作ったな。これコイルガンだろ、しか

もまあちゃんとスナイパーライフル型のフレームだし……。」

「後これなんかどうだ。特製連射式改造ロケット花火ガンだ。特製ロケット花火を３０連射できるぜ。もちろん花火は対人戦を前提で考えてるぜ。だから奴らが相手でも十分通用するはずだ。どうだ、高砂。」

「なあ、自慢中悪いんだが、どうやってこの兵器の山を運搬するんだ？おい、竜一、聴いてるか？」

「……。考えて無かったーーー！」

「ならば仲間を探すしかないな。」

「武器ならあるぜ！」

「さて、助けを求める声も聞こえたことだし、そんじゃヒーローになってきますか。」

第６話　３月２１日　午後０時０５分　光坂高校　四階　実習棟（後書き）

次回、高砂＆竜一、ヒーローになる。（多分）

第７話　３月２１日　午後０時１５分　光坂高校のどこか（前書き）

予定通り二人がヒーロになります。

第7話　3月21日　午後0時15分　光坂高校のどこか

「竜一、声が聞こえたのはこっちの方で合っるよな。」

「ああ、こっちの方で間違いない。その証拠にこっち側にくれば来るほど奴らの数が増えてるだろ。」

俺たちは今、生存者を探すために危険を覚悟の上で悲鳴がきこえた方向に向かって走っている。だがどこかおかしい、特にわからないが何かがおかしい。

「高砂、どこかおかしくないか」

今まで戦ってきた奴らとは何かおかしい、なにか嫌な予感がする。

「ああ、龍一もそう思ったか、まあ、今は気にしないほうがいいな。」

「ああもうすぐ、悲鳴が聞こえた場所だ。」

「だが、ここは廊下だぞ。隠れる場所はないぞ。仮に死んだのなら死体があるはずだぞ。」

「竜一、今は死んだら奴らになるんじゃないか？」

「ああ、ゴメン、そうだった。ん？あれは？」

「おい高砂！あそこ、生存者だ！7人居るぞ！周囲に奴らがいる、どうする？」

いや、何かがおかしい。あれは仲間割れか。

「いや、竜一、厳密には3名だ。女子を襲ってる下衆がいるぞ。どうする？あの世に送るか？」
ん？何か隣で聞こえたぞ。
「フッフッフ…。俺の前世である、鬼より怖いと言われた憲兵の血が疼くぜ！」
「おっ、おい。」
竜一、何か性格変わってない？
「高砂！後方から援護を頼む、ちょい女子を襲ってる非国民共を粛清してくるぜ！」
行くぜ！海軍精神見せてやらぁ！

「やめなさいよ！この変態！」
「いいじゃんねえかよ、犯らせろよ。」
「やっ、やめてください、どこ触ってるんですか。」
「犯せろってんだよ。先輩だろ。言うこと聞けよ。」
「離せ！それ以上汚い手であいつらに触んな！」
「おい、そいつ黙らせろ。」
「先輩に逆らうんじゃねよ！」
「うっ……。」

「さて、邪魔者も黙ったことだしじっくり犯してやるよ。」
「おい、お前らさっさとこいつら連れてけ。」
「わっかりましたー。」
「おい、大人しく付いてこいや。」
「いやっ、やめて、誰か！」
「助けなんてこねえよ、全員死んだんだよ！」

「勝手に死んだ事にされちゃあ困るな。」
さーて、いっちょ行きますか。
「誰だアイツは。」
「気違いじゃないスっか？」
「グアッ…！」
「先輩！」
「次かかってこいやー！！」
「やれ、相手はたかが1年坊だ！ぶっ殺せっ…」
「グウァ…。」

「テメェよくも先輩を！」

「おい、誰か忘れてねえか？」

このままだと竜一にいいとこ全部もってかれちまうな。よし俺も真面目に援護射撃するか。

「食らいな！」

「クッ……、何て力だ、一年坊のくせに。」

「貰った！死ねや1年坊！」

「しまった！」

竜一の背中にバットが降り下ろされる。が、その時。

パスゥン…

高砂の持っているコイルガンから一発の弾丸が放たれた。そしてその弾丸が男子生徒の肩を貫く。

「痛ぇぇ！クソッ、あいつ何やりやがった！」

「ナイス援護だ、高砂！よし、一気に行くぜ！」

「おう！皆殺しにしてやるぜ！」

「高砂、後ろは任せたぜ！覚悟しろや非国民共！」

第７話　３月２１日　午後０時１５分　光坂高校のどこか（後書き）

次回、新キャラが登場します。（多分）

第８話　３月２１日　午後０時３０分　光坂高校　四階　実習棟（前書き）

相変わらず下手な文です。

第8話　3月21日　午後0時30分　光坂高校　四階　実習棟

「危ないところを助けてくれてありがとう。私の名前は高嶺麗奈よ。で、そっちのオロオロしてるのが」

「みっ、美琴神奈です。よっ、よろしくお願いします。」

「で、そっちの倒れているのが」

「うっ、碓氷、秋名だ、バタッ…。」

「俺の名は糸魚川高砂だ。で、そっちが笠木竜一、主に武器の制作係だ。」

仲間は5人か…。まあ、一応これで安全に脱出が出来る最低限の人数になったな。幸い男女比もいい感じだしな。

「高砂、どうする？もう脱出の計画を立て始めるか。5人いればとりあえず安全に脱出が可能だぞ。」

「だけどあんな悪魔のどう立ち向かうんですか？私が弓で撃っても全く効いてなかったんですよ。いくもなんでもあんな大群に立ち向かうなんて無謀です。」

正直怖い。だってあんなに傷だらけになっても何事もなかったかのように立ち上がってくるから。それにもし捕まったら……。考えただけでも…。

「神奈…、怖いのは分かるわ。もちろん私だって怖くないと言ったら嘘になる、でも何時までも怖がっていたらいつかは奴らの仲間に

だけよ。私は生きたいから怖いのを必死に我慢して戦うのよ。今すぐ気持ちを変えろとは言わないから、だから少しずつ一緒に頑張ろ。」

正直私だっていつまで生きれるかわからない。勿論、怖い…。でも、だからこそ最後まで足掻きたい。それに、後輩の前で情けないとこ見せられないよね。

「ありがとうございます、麗奈先輩、なんだか少しだけ怖くなくなりました。でも、怖いですけど、頑張れるだけ頑張ってみます！」

「さて、全員の意思も決まったところで」

「あの、高砂先輩、まだ一人だけ倒れたままの気が…。」

「ああ、秋名だっけ、あいつなら竜一と何か訳の分からない話をしてるぞ。」

「竜一さん、このラジコンヘリにそのロケット花火用のミサイルベイを作れませんか？そうすれば数体程度の奴らなら迎撃が可能になるはずです。」

「おう、お前なかなかいい考えしてんな。俺もそう思ったところだ。ちなみにコイツあと何キロぐらい離陸重量に余裕があるんだ。」

「恐らくあと2～3kgならいけるはずです。」

「なら、ついでに補助翼付けてそこに色々増設するか、秋名、手伝ってくれるか？」

「ええ、任せてくださいよ。」

「なっ、何かかなり危なそうな話してますね。」

「今は構わないほうがいいぞ。ああなった以上竜一は気が済むまで止まらない。」
「そっ、そうみたいですね。」
「ああいう部類の人間同士、話が合うと恐ろしいわねー。」
「ああ、改めて実感した。」
「じゃあ俺たちも脱出の準備をするか。神奈はそこにあるマガジンに弾を込めてくれ。麗奈は武器の確認と残弾の確認、あとそれが終わったら見張りを頼む。」

「わっ、わかりました。」
「何で命令口調なのよ、まあいいわ、やりましょう。これ借りるわよ。」
そう言って麗奈がコイルガン（サブマシンガンタイプ）を持って行った。のは言うまでもない。

「このメンバーならマジで行けそうな気がするな」
そう小声で高砂が呟いた。

第８話　３月２１日　午後０時３０分　光坂高校　四階　実習棟（後書き）

次回は久しぶりに高原編の（予定）です。恐らく近日更新です。
ただし、気分により高砂編になるかもしれません。

番外編その２　敵勢力（前書き）

その名のとおり敵勢力の紹介です。

番外編その２　敵勢力

勢力１　奴らなど

奴ら（ゾンビ）
怪物共。攻撃方法は噛み付くなどの単純なものしかないが噛まれると奴らになるため非常に危険。稀に突然変異体になることもあり、そうなると能力は完全に人智を超越する。
１７年前にも発生しており現在ではそのことを一般的に世界改変の日と呼ぶ。

体力　★★★★★
精神力　★
攻撃力　★★★★★
防御力　★★
スピード　★
持久力　★★
瞬発力　★
頭脳　★

弱点　頭（一定以上のダメージを与えれば一撃で倒せる）
攻撃方法　噛み付き　威力★★★

奴ら　変異体（触手・刺）
奴らが突然変異したもの、通常は遅いはずのスピードが大幅に強化されており非常に危険。
攻撃方法として刺付きの触手を振り回して攻撃を行いそのダメージ

は計り知れない。皮膚も非常に固く並みの攻撃は通用しない。

体力　★★★★★★★★
精神力　★★
攻撃力　★★★★★★★★
防御力　★★★★★★★★
スピード　★★★★★★★★
持久力　★★★★★★★★
瞬発力　★★★★★★★★
頭脳　★★

弱点　頭（一撃では倒せないがかなりのダメージを与えられる）
攻撃方法　噛み付き　威力★★★★★
　　触手攻撃　威力★★★★★★★

御影　新堂
とある狂気じみた宗教を信仰しており、その思考は非常に危険。通常時の戦闘能力も高くかなりの強敵だが、今回の戦闘では薬を使い更に戦闘力を強化してるため異常なまでの戦闘力を誇る。

体力　★★★★★★
精神力　★★★★★★
攻撃力　★★★★★★
防御力　★★★★★★
スピード　★★★★★★
持久力　★★★★★
瞬発力　★★★★★★
頭脳　★★★★★★

弱点　不明
攻撃方法　不明

ダークシーカー
某映画に出てきたアレそのまんま。今作では奴らと似たものとして扱われている。映画と同じように目も耳も使えるためかなり危険な存在。更に群れと遭遇した場合、状況次第では変異体よりも強敵。但し、映画と同じように紫外線などには非常に弱くため日の下に出られない。

体力　★★★★★★
精神力　★
攻撃力　★★★★★★
防御力　★★★★
スピード　★★★★★★
持久力　★★★★★
瞬発力　★★★★★★
頭脳　★

弱点　頭、紫外線（こっちの方が良く効く）
攻撃方法　噛み付き　威力★★★★★
殴り　威力★★★★

第９話　３月２１日　午後０時４５分　光坂市住宅街東地区（前書き）

この話を書くために徹夜しました。相変わらず下手な文です。

第９話　３月２１日　午後０時４５分　光坂市住宅街東地区

「隊長、次さっきみたいな奴が出て来たらどうするんですか？もう自分、下水道は行きたくないですよ。」
もう嫌だ。もうリッカーとは戦いたくない。あの舌で舐める攻撃はとにかくタチが悪すぎる。

「なんだ、高崎、リッカーが怖いのか？おれは俺はあんなの怖くないぜ！俺の２丁スコーピオン乱れ打ちにかかればあんな奴敵ですらないぜ！」
しかしさっきから何か気配がするが気のせいか？何か嫌な予感がするし取り敢えず武器を弾幕の張れるＡＫに変えとくか。

「総員、油断するなよ。この辺は高層建築物が多い。万に一つに備えて上面の警戒を怠るな。高崎はグレネードランチャーをいつでも打てるように構えとけ。」
もしかしたら来てるかもな、あの馬鹿どもの連中。奴と万に一つ対峙するとしたら犠牲を覚悟しないといけないから厄介だ。それに今ある最大の火力を持つ武器はグレネードランチャーだ。恐らく、いや奴と対峙するのであれば最低限ロケットランチャーが無いとかなりきついな。

「零次、もし奴が来たらどうする？スイスの時は偶然あった２０ｍｍガトリング砲を当てまくってなんとか追い払ったが、今回はそうはいかないぞ。」
ヤバイな、もしかしたらさっきからした気配は……。

「高崎！上だ！」

やはり来やがったか。だがこの前の時よりもかなり格下だな。

「わかってます！」

その声とほぼ同時に高崎の持っているグレネードランチャーから弾丸が敵に向かって一直線に放たれた。そしてその弾丸は敵の少し手前で爆発を起こした。

「殺ったか…。」

「まだだ、高崎！」

そう言い発と伊坂が煙に向けてＡＫ-７４を放った。それとほぼ同時に零次もＭＰ５を放った。

しかし…

「しまった！」

「遅いよ！」

高崎の後ろを捕った少女はそう言い放った。

そして…。

「ぐあっ…。」

瞬間移動のような速さで高崎に迫りそして高崎をを蹴り上げた…。

「高崎！大丈夫か！」

「そこの人！他の人の心配してていいのかなぁ、次は君の番だよ！」

「そうは行くか！」
そう叫ぶと錬次は懐から2丁のスコーピオンを取り出しその少女に向け放つ
しかし少女は瞬時に錬次の銃撃に反応し
「アンタもさっきのヤツと同じようにしてやるわ！」
そう言って錬次に回し蹴りを入れようとする
…が、しかし。
「入りが甘いぜ！」
そう言い少女のもう片方の足を払う。
「くっ…。」
少女も瞬時に反応その蹴りを躱す。
しかしそれこそが錬次の作戦だったのだ。
「かかったな！」
「しまった！」
そう、錬次は蹴りを入れると同時に片手にスコーピオンを構えていたのだ。そして今の彼女はその攻撃に反応しきれてない。
「止めだ！」
そう言い放つと錬次は手に持ったスコーピオンを放った。

数十秒後。
「ぐっ」
少女が起き上がる。
「お前、何処の差し金だ。レジスタンスか？それともダークネスか？」
零次が問い正す、零次このような質問をしたのには理由があった。それは彼女が特殊な存在だからだ。普通の人間であればまず２０発もの銃弾に耐えられる訳がない。
「アンタたちに答える義理はないわ。どうせ私は任務に失敗したから殺されるだけよ、それに今殺されても私にとっては少し死刑執行が早まるだけよ。だから質問に答える気はないわ。」
「なら殺しても構わないな。」
そう言うと零次が少女に銃口を向ける。
「構わないわよ。早く犯すなり殺すなりしなさい。」
「そうか、じゃあ死ね。」
零次が引き金を引く。しかしそれは少女に向けてではなく空に向けてだった。
「なんで…何で殺さなかったのよ！」
少女が叫ぶ！
「敵意が見えない。ただそれだけだ。」

「アンタ、馬鹿なの？敵の武装解除もしないでよくそんなことが言えるわね。」

「俺達が、そんな敵を前にしてそんな初歩的な事を忘れると思うか？錬次。」

「ああ、確かに、挙動、攻撃、反射神経、どれをとっても相当なものだったがまだまだ、隙が多いな。それともう武装解除は終わっている。」

「なっ、いつの間に！」

少女は呆気に取られた表情で言う。

「ってな訳でお前の完敗だ。そして俺からも聞きたいことがある。さっき零次が言ったように戦っててもの確かに敵意を感じなかった。まるで戦う意思がないかのようにな。」

「ええ、戦いは好きだけど今回の戦いは私の本位ではないわ。」

「その様子だと本国に相当な恨みがあるようだな。その様子だとやはりスイスの一件絡みか。」

「高崎！もう動けるのか！」

「ああ、確かに効いたが幸い急所は外してくれたようだからな。」

「殺す気がなかったからよ。それとスイスの一件が絡んでるのも正解よ。」

「お前の名は？」

「ロランス・ミーシャよ。所属はダークネス帝国軍。階級は兵長よ。」

「ミーシャ。俺達もダークネス帝国に恨みがある。ここは一時共同戦線といかないか。」

戦場においては仲間が多いほど生存率が上がる。彼女なら戦闘に関しても問題ないだろう。あとは彼女が承諾してくれるかどうかだ。

「分かったわ、この状況においては手を組むのが双方の生存率を上げる一番の得策だわ。止むを得ないから手を組むわ。」

「了解した。では予定通り我々は光坂高校方面に向け移動を開始する。」

第１０話　３月２１日　午後１時００分　光坂市住宅街東地区

「なあ、ロランス兵長、このバイオハザードに帝国はどれほど関わっているんだ？」

「下っ端の私に解るわけないじゃない。まあ、私が思うにおそらくこの件に帝国が関わってるのは間違いないわ。恐らく意図的にね。恐らく私が派遣されたのもきっとそのことに関係があるわ」

「ミーシャ、一応隊長には言葉使いを考えろ。」

高崎が不満そうに言う。

「あら、さっき不意打ちを受けたのをまだ怒ってるのかしら。さっきは油断していたアンタが悪いのよ。」

ミーシャが挑発する。

「テメッ…！」

「おい、二人ともやめろ。高崎もそんな挑発に乗るな。それにもう普段どりの言葉づかいでいい、どうせこの任務は長期戦になるんだ。いつ戦闘があるかも分からないいんだ。今はなるべくリラックスしとけ。」

全く、高崎の野郎もほんとに頭が硬いんだから偶にに困るんだよな。

「いいんですか隊長？」

「ああ、構わない。」

「そういえばミーシャ、この任務が終わったらどうするんだ？まさか帝国に戻る気か。」
龍一が心配した表情で質問する。それもそのはずだ。恐らく任務に失敗した彼女に軍に戻ったとしても居場所はない。それどころか良くて監獄行きだろう。
「戻るところなんてないわ、それに私はあの帝国が嫌いなの。とくにあの馬鹿な上層部がね。」
あの上層部だけはありえないわ、何で任務に失敗した奴を戦犯扱いするのよ。
「なら、うちの軍に来るか？お前ほどの実力があれば即戦力になるだろう。いいよな高原。」
「ああ、お前とまともに張り合える実力があれば問題ないだろう。今、上層部に掛け合ってみる。」
高原が通信器を取り出す。
「ちょ、ちょっとそんないきなり！」
「まあ、観念するんだな。」
「ちょっとアンタそれさっきの仕返しのつもり！」
「イージス艦なぎさ通信室、応答してくれ。」
「はい、こちらイージス艦なぎさ通信室です、どうぞ。」
「艦長室につないでくれ。高原からの通信だと言えばわかる。」
「了解。今繋ぎます。」

「代わったぞ、こちら艦長室だ。高原、何か進展があったのか？」
「はい、まずは、お願いがあるのですがそちらからでいいですか？」
「ああ、構わない。」
「ダークネス軍の兵隊を拘束したのですがどういたしましょう。」
「ああ、危険がないのであればお前に処分は任せる。」
「通信がはいった　ちょっとまっててくれ。」

「何があった。」
「艦長！非常事態です！距離７０マイル！超大型艦を発見しました！」
「なんだと！詳細な情報は！」
「はい、敵艦のサイズは１３０から２９０メートル１６隻の艦隊です！」
「なに！」
「艦長！指示を！」
「全速力で振り切るぞ！恐らく速度ならこちら分があるはずだ！」
「了解した！」

「高原！とにかくそいつの対応は任せたまた後で通信してくれ。」
「わかりました！」

「何があったんだ！」
「どうやら艦隊と遭遇したようだな。」
「まあ、あの艦長ならなんとかしてくれるか。」
「だな。」
「それとミーシャ兵長のブラドー隊への入隊許可が降りた。」

「ハァー！何言ってんのよ！」
「なら決まりだな！」

「ちょっと高崎！ふざけないでよ！」
「さっきの仕返しだ！」
「何よ！」
「あの二人、馬が合わないようで会うよな、高原。」
「ああ、たしかにな。」

第１１話　３月２１日　午後１時０５分　光坂高校　四階（前書き）

相変わらず駄文ですがお楽しみください。

第１１話　３月２１日　午後１時０５分　光坂高校　四階

光坂高校　四階　廊下

「この辺の部屋は大体見回ったわね。でもなんでこの辺だけ奴らが少ないのかしら。まあいいわ奴らは少ないほどありがたいし。」

１５ｍほど離れた階段から人らしき物が上がってきた。だが、なぜか血の気がない。何故なら彼らはすでに死んでいるからだ。

「…、ん?、あれって奴らかしら。」

麗奈が見つめる先には奴らがいた。ただその数は三体でまだ気づかれておらず、コイルガンを装備している麗奈であれば一方的に攻撃を加えることができた。

「これだけ離れていれば安全ね。使ったことはないけど、取り敢えず引き金を引けば弾が出るのよね。この先これを使う機会がきっと増えるから、今の内にのうちに練習しとかないと、それに野放しにしておいたら後々厄介よね。」

光坂高校　四階　臨時作戦本部

「高砂先輩。弾のセット終わりました。」

「ああ、ありがとな神奈。あともうひとつ頼みたいことがあるんだがいいか?」

「何ですか？」

「麗奈呼んできてほしいんだ。一度現状の確認と作戦会議を行いたいからな。それともし奴らがいたら可能であればでいいんだが掃討を頼む。ああ、あと武器はあそこのやつを自由に使っていいからな。」

「分かりました。じゃあ行ってきます。」
そう言って神奈はボウガンを持って駆け出して行った

「いいのか高崎、あいつ一人で行かせて。」

「大丈夫だ。あいつのには武器の使い方は一通り教えたし弓道部所属なら射撃精度の方も問題ないだろう。それより竜一、ヘリの方はどうだ。」

「ああ、ベースがかなり高性能な奴だし、しかもかなり改造が施されている。さっき兵装を付けてテスト飛行したが機動性も問題ない。それにカメラに関しては小型の癖して１８倍ズームだ。」
竜一もこのカメラに事に関しては驚いていた。ここまでの高性能小型カメラは一般には販売されてないはずだ。

「ええ、元々はそのカメラは盗撮用に自分が開発したカメラですから。勿論、フルＨＤで撮影できますよ。それにそのヘリも元々は盗撮用ですから。」

「オイオイ秋名！、無駄にハイスペックだが使い方おかしいぞ！」
こいつ、まさか竜一と同類か…。

「なあ、もしかしたらそいつを使えば麗奈の入浴シーンを！」
「いいえ、麗奈先輩だけではなく神奈の入浴シーンも観察できますよ！」

「お前らこの会話が彼奴らにバレたらただじゃ済まないぞ……。」
ああ…、変態が二人も来てしまった。

「お前だって見たいんだろ高砂！」
「高砂先輩はどっちが好みですか？自分としてはスタイルのいい麗奈先輩もいいですけどどちらかと言えば神奈の方がいいですね！」
「い、いや、俺は……。おっ、おい！竜一、秋名！うっ、後ろ！」
そこには鬼の形相をした麗奈と神奈がいた。

「いっ、いや、これに分けが……。」
「龍一先輩、起こった神奈は般若に変身しますよ。
「ほら、言わんこっちゃない。俺、知らないぞ。」

「あら、あなた達、何を話してるのかな？特に竜一。」
「先輩、私に麗奈先輩を探しに行かせたのももしかして？」

「い、いや、俺はただ作戦会議を行うために呼んできてくれと思って。それに麗奈と神奈の入浴シーンを盗撮しようとしたのはそこにいる馬鹿二人だけだ！」
とんでもない、俺まで鉄拳制裁されてたまるか！あんなもん受けたら間違いなく死ぬ！

「先輩、嘘ついてないですよね？」
「大丈夫よ高砂はそんな馬鹿な事しないわ、まあ竜一ならそこの変態と組んでやりかねないけどね。と、言うことで秋名、竜一、覚悟はできてるかしら？」

「てっ鉄拳制裁だけはやめてくれーー！」
「先輩！助けてくださいー！」
「むっ無理だー！」

「死ねー！」
「覚悟してくださいー！」

「ギャァァァーー！」
「ヒィィィィーーー！」

「ああ、ご愁傷さま。」
そこには、鉄拳制裁を受けてる二人に向けて合掌を向けている高砂の姿があった。

第１１話　３月２１日　午後１時０５分　光坂高校　四階（後書き）

次回より学校脱出編が始まります。

第１２話　３月２１日　午後２時３０分　光坂高校　四階　実習棟（前書き）

最近、小説の編集で徹夜する日々が増えています。
そして明日から学校。間違いなく今の生活だと持たない……。

第１２話　３月２１日　午後２時３０分　光坂高校　四階　実習棟

「じゃあ、ヘリによる偵察も終わったことだし、作戦会議を始めるぞ。まずは秋名、偵察で分かったことを報告してくれ。」
まあ、あまりいい結果は予想してないけどな。さっきのニュースで見たら北海道と東北の一部以外では同じような有様だからな。

「取り敢えず偵察でわかったことは、第一にこの学校にいる生存者は自分たちだけは無いと言う可能性が高いということですね。ヘリを使って校舎内、校庭を調べましたが立て篭りが可能で何箇所かは封鎖されていました。それともう一点ですが学校の付近の道路に、普通の奴らとは明らかに違う姿をした奴らがいました。」

恐らく俺の感が正しければ、その変異を起こした奴らは普通の奴らより絶対に手怖い。
最悪はコイルガンでは対処できない可能性もある。そうなることを予想するとなるべくそいつらとの戦闘は避けたい。

「あまりいい状況とは言えないわね。ねえ、生徒会室の方はどうなってたかわかる？」

「残念ながら全滅でした、血痕も確認済みです。」

「そう…。でも、これからはこんなことで落ち込んでられないわよね。」

麗奈が少し悲しそうな表情をする。

「麗奈先輩…。無理しないでください。私でよければいつでも相談

に乗りますので。」

神奈が心配した表情で麗奈に話しかける。

「ありがとう、神奈。」

麗奈の目から涙がこぼれ落ちたのは気のせいだろうか。

数分後

「高砂。人員の配置について相談したいんだが。」

「分かった。そんで今のお前のプランはどんな感じだ？」

「取り敢えず秋名の報告結果と今まで俺達が奴らにあった場所、秋名、神奈、麗奈の奴らの目撃証言こいつらを重ね合わせた結果はどのルートを通っても奴らとの先頭は避けられない仮に避けられる可能性があるとすれば…」

「屋上からのラベリングのみか…。だが竜一、分かっているよな。」

「ああ、勿論この状況ではそんな危険な判断はできない、そのぐらいは分かっている。」

勿論二人だけの状況下ならやる可能性もあった。だが仮に俺たち二人ができてもあの三人はどうする。もしかしたらミリオタの秋名なら行けるかもしれない、だが、麗奈と神奈には恐らくラベリングは不可能だろう。

「なら一応聞くが竜一、お前の計画だとどう言う手筈で脱出することになっているんだ。」

「とりあえずは五人でフォーメーションを組んで全方位を警戒しつつ可能な戦闘は避け、職員室を目指す。その後職員室で車の鍵を回収後、校庭に脱出。あとは車に乗って俺の家に行くと言うプランだ。」

「ほぼ完璧だな。だが、まだ詰めが甘いな。仮に生存者との先頭が発生したらどうする。俺達は構わず引き金を弾けるがあの三人のは荷が重すぎるだろう。」

「いや、高砂先輩。俺は相手が人でも引けます。」

「秋名…。」

「第一に汚れ役は俺達の仕事のはずだ。あの二人だけには殺人者の汚名は着させたくない。その気持ちは同じはずだ。」

「秋名の野郎、カッコつけやがって。」

「それに作戦を立てるなら全員で話し合いましょう。あの二人もこのメンバーの一員です。」

「分かった。竜一も秋名の意見に異論はないな。」

「ああ、大賛成だ。じゃあ全員呼ぶぞ。」

同日、午後２時４０分

「よし、全員席に着いたな。じゃあこれより脱出作戦会議を始める。尚、進行は龍一に一任する。では高砂、脱出作戦のプランの提案を頼む。」

「分かった。ではプランを発表する。」

「まず第一段階として五人でフォーメーションを組んで全方位を警戒しつつ可能な戦闘は避け、職員室を目指す。第二段階は職員室で車の鍵を回収後、校庭に脱出。あとは車に乗って俺の家に行くと言うプランだ。」

「あの…。」

神奈が不安そうな表情で質問する。

「何だ神奈？」

「この作戦で一番危険な所はどこですか？」

「高砂、回答を頼む。」

「俺は校庭に出たあとが一番の山だと予想している。主な理由としては鍵が合う車を探す間は４人で奴らを迎撃しなければならないということと、更にここの高校の駐車場は立地の都合上奴らが集まりやすい、更に人員の都合上ラジコンヘリの操縦を確保できない。よって上空からの支援は不可能だ。」

「ありがとうございます。もうひとつ聞いていいですか？もしも屋上から支援が行えるとどうなるんですか？」

「もしも、かなり射撃とかがうまい奴が支援についたらかなり楽に

なるな。だがそのためには屋上の安全を確保しなければならない。でないと支援要因が安全に支援攻撃ができない。だが安全な屋上なら一応、確保はしてある。」

「それってどこですか？」

「ここの真上だ。そこの窓からロープで登れば行ける。」

「あっ、あの、わっ、私、行ってもいいですか？銃は使えませんけど…、ゆっ、弓なら自信があります！」

「なあ、竜一、弓で奴らは倒せるか？」

「恐らくあの距離なら可能だ。あとは神奈がラベリングが出来るかが問題だ。」

「やっぱりそこが問題か…。神奈…。ラベリング、出来るか？」

「はい、自信はないけどやってみます。」

「分かった、その代わり、俺も付いていく。」
やっぱり、あいつ一人だと不安だからな。それに狙撃なら少しは自信があるからな。

「分かった、高砂。お前がそこまで言うのならば俺は何も言わない。」

「すまない、感謝する。」

「じゃあ、後方支援は神奈、高砂、任せたぞ！俺達が校庭に出るま

でになるべく奴らの数を減らしてくれ！」

「はっ、はい！」

「任せろ！」

「じゃあ、俺達3人は確実に校庭まで脱出するぞ！」

「分かったわ！」

「おうよ！」

「じゃあ、後方支援班は先に屋上に登ってスタンバイ、狙撃準備を開始してくれ！俺達は狙撃開始より5分後に行動を開始する。」

「狙撃開始時刻は午後3時。俺達は3時5分より行動を開始する。各員間に合うように準備してくれ！」

「はい！」

「任せろ！」

「行くわよ！」

「了解だ！」

第１２話　３月２１日　午後２時３０分　光坂高校　四階　実習棟（後書き）

恐らく明日から投稿のペースが３日に一度程度となるのでご了承ください。

第１３話　３月２１日　午後２時３０分　光坂高校　四階　実習棟（前書き）

いよいよ学校脱出編が本格的に始まります。

第１３話　３月２１日　午後２時３０分　光坂高校　四階　実習棟

同日、午後２時５０分

「高砂、一応こいつも持って行け。」

竜一が何か怪しい直径２０ｃｍもある筒状のものを渡す。まあ、明らかに危険物とは分かっているんだが…。
だが今回ばかりはマジでヤバイ気がする。

「一応聞くがこれ、花火なんて生易しいものじゃないよな。」
こいつ、まさか、ダイナマイトまで自作したのか…。いやまさかな、いくら竜一でもそんなものまでは……、いや、こいつならマジで作りそうだから怖い。

「ああ、そいつは俺特製の打ち上げ花火だぞ。だけど下手に打ち上げるなよ、そいつ打ち上げ花火と言っても広域制圧用の打ち上げ花火だからな。」

こいつ、マジでなんてヤバイ物作ってんだよ。戦争でもする気か。
「まさか、中に入っているのは……」

「ああ、主に炸薬としてニトログリセリンを少々とあとコイツは火炎弾仕様だから特製着火剤とあとガラス片を詰め込んである。」

「ちなみに威力の方はどんな感じだ？」
その威力は聞くまでもないが一応聞いておこう。もし威力が高すぎ

て仲間にも被弾したら間違いなく鉄拳制裁確定だからな。

「ああ、コイツは発射からある程度の時間が経つか敵に当たると炸裂する。勿論直撃させればかなりの強敵にも通用するが、それだと勿体ないからな。こいつの本当の強さは上空に向けて撃ったと時だ。つまり…」

「上空から火の雨が降り注ぐってことか。」
こいつ…、テロでも起こす気だったのか…。

「そのとおりだ。あと照準を合わせる時はここにあるスコープをのぞき込め。」
こいつなら上手い具合にこの特製の打ち上げ花火を使いこなしてくれるだろう。頼んだぜ高砂、今回の作戦はお前に掛かってるんだからな、絶対な成功させてくれよ。

「分かった、あと注意点はなんかあるか？」
おそらくこれ、使い方間違えたら……死ぬ。

「特にはないな、あと今後のことも考えると今回の作戦で使えるのは3発までだからな。それだけ気を付けてくれ。」

「任せとけ、全弾確実にやるからな。」
要するにこいつを奴らの真上で炸裂させてやればいいんだな。必ず最高の結果を出してやる。

「それと高砂。話は変わるが、ここにある武器共だが半分はお前と神奈がラベリングすると時に一緒に持ってきてくれないか？」
できればこっち側で全部の武器類を持っていきたいのは山々なんだがこの量だとさすがにキツイしな。

「分かった。じゃあ俺は準備の為にもう上に行くぞ。あと5分しかないからな。」

「分かった、健闘を祈る。」

同日、午後3時００分

「こちら竜一。高砂、始めてくれ。」

無線から竜一の声が響く、作戦開始の合図だ。

「了解、これより校庭の安全を確保するため、奴らの殲滅を開始する。」

さて、派手に行くか。

「高砂先輩、撃っていいですか。」

私も頑張らないと。みんなと無事にこの学園から脱出するためにも。

「ああ、ＯＫだ。派手にやってやれ！」

「はい！」

そう言うと神奈は深呼吸をし息を整える、そして弓を構えた。

多分、この弓だと確実に相手を確実に射抜ける距離は４０ｍぐらいだわ。なら最初に距離感を掴むためにもあの辺から狙うのが一番ね。

狙いは定まったわ、覚悟して。

そして神奈が弓を放つ。放たれた弓矢が一直線に奴らに向かっていく。そして弓矢は奴らのの頭をそのまま一直線に貫く。

「初弾当たりました！高砂先輩、距離感は完全に掴めました。このまま一気に倒します。」

「ああ、そっちの方は任せたぞ！俺はこいつであそこにいる奴らを叩く。」

「照準は、確かこのラインとここのサークルが一致すれば合ったことになるんだよな。」
そう呟きながら俺は照準を合わせた。

「よし、照準があった！神奈、一旦射撃を中止してくれ！」

「分かりました、高砂先輩。」

「よし、砲撃開始！特製打ち上げ花火…、発射ー！」
そう言って俺が発射スイッチ押すと大量の煙と共に特製打ち上げ花火が発射された。

そして数秒後。

特製打ち上げ花火はちょうど上空５０ｍ程で爆発を起こし内蔵されていた着火剤とガラス片を広範囲に降り注がせた。爆発の勢で打ち出されたためにガラス片は超高速で、しかも着火剤が付着していたために炎をまとった状態で降り注いだため、例えガラス片が頭に刺さらなかった奴らも次々に体に付着した着火剤から火が燃え移り辺

り一面は地獄絵図と化した。
「スゲーなこいつは、もしかしたらあの辺にいた奴らこれ一発でほとんど倒せたんじゃないか。」

「先輩、こっちの方に手を貸してください。弓矢が無くなりそうです！」
神奈の方を振り返ると確かに筒の中に入れたあった弓矢の数が減っていた。

「あと何発ぐらい有るんだ！」
マズイな、もし神奈の弓矢が尽きればこっち側の弾幕は確実に減る。一応神奈には万が一のためにボウガンは持たせてあるがそれでも弾幕の減少、命中率の低下は避けられない。

「あっ、あと15発ぐらいです！」

「チッ、しょうがないこいつを使え！弓矢はいざという時まで取っておくんだ！」
そう言って俺は神奈にコイルガンを手渡す。こいつならボウガンよりかなり軽いし何より
100mの有効射程距離を持つから中距離、長距離の射撃が得意な神奈には最高の武器だろう。それに弾をあるだけ持ってきたからな。

「いっ、いいんですか、私がこんなもの使って…。」

「ああ、構わない。むしろ使ってくれ。神奈の弓矢の腕前ならきっとこいつも使いこなせる筈だ！それにボウガンなんて重いものを乙女に使わせたりはしたくないからな。」

「でも…」

「いいから素直に先輩に甘えとけ。」

「はい…」

「分かったならさっさと迎撃に移るぞ、また校庭に奴らが迫っている。俺はあの距離だと当てられる自信はない。だから神奈、頼んだぞ！」

「はい！」

同日、午後3時05分

「じゃこっちも行くか。」

校庭の安全の確保は高砂達が必ずやってくれるはずだ

「麗奈先輩、自分がそこのドアを開けるので万に一つに備えてそれを構えといてください」

もし、奴らが出たら、いや、今は考えないでおこう。

「分かったわ、援護は任せて。」

「では行きます。」

バァンと秋名が勢い良く扉を開ける。

「全員周囲の警戒を怠るなよ。何としても無事校庭に辿りつくんだ。

」

「ええ、勿論よ！」

「神奈の為にも絶対にたどり着いてやる！」

第１４話　３月２１日　午後３時０５分　光坂高校　校内

「四階、西階段、奴らの気配無し、クリアです！」

「よし、麗奈。前衛は任せたぞ、秋名は後衛を頼む。」
ここまでは順調だな。だが下に行けば行くほど奴らの数は増えるはずだ。それに生存者との戦闘が起こる可能性もある、問題はこのままのペースがいつまで続くかだな。

「分かったわ竜一、任せて。」

「先輩、かなり遠くですけど生存者同士の戦闘が起きてる様子です。さっき戦闘音が聞こえました。」
ヤバイな、もし巻き込まれたら厄介だ。奴らは音に反応するから戦闘音なんて聞こえたら校内に居る奴らが全部集まるに違いない。そうなれば俺達は全滅だ。

「場所はどの辺だ。」

「二階の北エリアの辺りです、恐らくかなりの規模ですね。戦うのは得策ではないかと。」

「ああ、戦ったら時間の無駄だ。少しルートを変えるぞ。ここから一気に一階まで降りよう。奴らとの戦闘になるかもしれないが生存者と戦うよりはマシだ。」

「分かったわ。」
「了解しました。下の方の偵察に行ってきます。」

「ああ、任せたぞ秋名。」

同日、午後3時10分

「西階段に敵は無しと。ここなら安全に行けるな。さて、戻るか」
こいつはラッキー！奴らは今ごろ二階に行ってるな悪いけど俺たちはさっさと行かせてもらうぜ。

数分後

「竜一先輩、西階段、3階から1階までクリアです！このルートを使いましょう。」

「ああ、それしか無さそうだな。全員、奴らとの戦闘を覚悟しろ。このまま一階まで行きそのまま職員室へ強行突破をかける！秋名、先頭を頼んだぞ。」

「じゃあ私は後方を警戒するわ。」

「全員突撃！行くぞ！」

「おう！」
「行くわよ！」

「よし、一階に到着だ。ここから先はどこに奴らがいるか分からない慎重に行くぞ。」

「竜一先輩、脱出に使う車は何にしますか、自分としてはスカイラインかランエボがいいんですけど。」

「馬鹿だな秋名は男ならパジェロと決まっているだろ。」

「確かにこの状況だと一番いいのはパジェロですね。」
この状況で優遇される車の条件は高い馬力、そして強度、積載量、それに走破性だ。
馬力に関してはどの車もクリアだ。だが走破性を考えるとスカラインは怪しい。残りの二つはランエボはＷＲＣに出てるぐらいだから悪路には強いだろうしパジェロに至っては見たまんまだ。だが肝心なのは積載量、強度だ。何より積載量は多いほうがいいし強度は高ければ高いほど嬉しい。この全ての条件をクリアできるのはパジェロだけだ。

「二人とも話してる最中悪いけど奴らに見つかってるわよ。それもかなりの数にね。」

「やっぱり全部上には行ってなかったか。麗奈、秋名、職員室から俺が鍵をとってくるまでの間時間を稼いでくれ。」

「了解よ。行くわよ秋名！」
いよいよ始まるわ、本格的な奴らとの戦いが。

「元より承知だ！」
やってやるぜ、この命尽きるまでな。

第１５話　３月２１日　午後３時１０分　光坂高校　校内（前書き）

大分予定オーバーをしました。１５話です。

第１５話　３月２１日　午後３時１０分　光坂高校　校内

「麗奈先輩！そっちの弾は持ちそうですか！」

廊下に秋名の声が響く。俺は今、麗奈先輩と職員室で奴らを迎え撃っている。幸いにも二階で生存者同士の戦いが起きている間は校内にいる奴ら全部とは戦うことはないだろうし弾薬も十分にある。

「ええ、問題ないわ！さっき補充したばかりだからね。まだまだ行けるわ！」

これだけ弾があればしばらくは問題ないわね。まあ、仮に竜一が言っていた変異体と戦うとなると話は別だけどね……。

「麗奈先輩！向こうに新たな奴らの群れです！」

またかよ、すぐには弾は無くならんだろうけど長期戦は少しマズイかもな。このペースだと持って４０分ってところか。

「秋名！援護をお願い！」

「わかってます！」

午後３時１５分　光坂高校　職員室

「クソッ、鍵が見当たらねえ、こっちはただでさえ急いでるのに！」

参ったな、引き出しも調べたが見つかるのは、カップラーメン、書類、スナック菓子、あと通知表。いったい鍵は何処にあるんだ。

「もしかして、ここか。」

そう言って竜一は給湯室に向かう。だが……。

「クソッ、」

そこには奴らがいた。数は一体だったがとっさの出来事に竜一は反応できず、そして

「グアッ……。チッ、腕をやられたか、だが噛まれてはいないから恐らく奴らにはならないか。」

竜一は腕を奴らに攻撃されたが幸いにも噛まれたわけではなく引っかれただった。これなら恐らく奴ら化する確率は低い。

「まあいい、とにかく今は鍵が優先だ。早く見つけないとあの二人が危ない。」

早くしないと高砂と神奈が危ない。やつらは音を頼りに獲物を探す、恐らく最初の特製花火のせいで上には相当な数の奴らが向かっているはずだ。いくらあそこのドアを強化しておいたとはいえあまり長くは持たないはずだ。

そう竜一が高砂達の心配をしていると……。

「先輩、大変です！」

秋名がかなり焦った様子でドアを開けた。

「大変です！上の戦闘音が無くなった途端に多数の奴らがこちらに向かってきました！」
ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！フラグ立ったよこれ。
「状況は！」
「今、麗奈が弾幕を張っています。」
「今すぐ麗奈をこっちに戻せ！急いで全員で鍵を探すぞ！」
無理だ、早く戻さないと間違いなく麗奈が噛まれる。
「了解！」

同日　午後３時２０分　光坂高校屋上

「先輩、大変です！そこのドアが！」
このままだとここに奴らが……。
「しょうがない、俺が時間を稼ぐ、神奈はこのまま狙撃を続けてくれ。」
やむを得んな。このままだともう少しでドアが破られる。せめて神奈だけでも何とか……。
「それだと先輩が！」
「大丈夫だ絶対に噛まれたりなんてしない。それにあと数分もすれ

ば竜一達が校庭に出るはずだ。だから何としても奴らの数を減らさないといけない。だから神奈、心配するな。」

何としても神奈だけは、もうあんな悪夢は繰り返させない。絶対に生き延びるんだ！

「解りました。でも、絶対に無理はしないでくださいよ。」

「ああ、分かったよ。」

同日　午後３時２５分　光坂高校職員室

「竜一！鍵見つけたわよ！マイクロバスのやつだけど。」

予想外ね、私としてももっと別の車のほうがよかったのだけど…。

「もうこの際どんな車でもいい！とにかく早く学校から脱出したいんだよ！」

もう、こんままだとかなり予定オーバーしそうだ。早く家にたどり着いてほかの奴らを休ませないと。

「先輩！奴らが戸を破りました！もう入口から脱出は不可能です！」

マズイ、マズすぎる！このままだとガチで死ぬ！

「窓から抜け出すぞ！秋名、そこの荷物を頼む！」

「分かりました！」

同日　午後３時３０分　光坂高校駐車場

「よし！開いた！秋名、運転いけるな！」
秋名なら運転ぐらいはいけるだろうあいつ頭文字Ｄの天才だからな。

「ええ、任せてくださいよ！見せてやります……、赤城の流星の力を！エンジンスタート！」
そう秋名が言うとバスのエンジンが高々と響いた。しかしそれは同時に周囲の奴らを呼び寄せる行為でもあった。

龍一が無線機を取り出した。

「こちら竜一、高砂、今そっちに向かう、もう少し耐えてくれ！」

同時刻　屋上

「神奈！もう少しで竜一達が真下に来るぞ！」

「ほっ、本当ですか！」

「ああ、間違いない！」

同時刻　バスの中

「ヒャッホーー！轢け轢けーー！秋名様のお通りだーー！」

そこには完璧に壊れた秋名がいた。

「秋名！腕は相変わらずだな、流石は赤城の流星。」

「いえいえ、自分はまだまだですよ。ランエボマスターこと、竜一先輩。」

再び龍一が無線機を取り出す。

「高砂！真下に到着したぞ！早く降りてこい！」

「ああ、分かった！にしても遅かったな。」

「済まないな、宝探しに苦労した。」

屋上

「神奈、先に行け！」

「はい！」

同日　3時35分　バスの中

「竜一こいつは何だ？」

まあ、あいつの事だから弾薬とか武器だと思うけど。

「残念だな。お前の予想は外れだ。コイツは保存食とスナック菓子

だ。」

「保存食ってところがお前らしいな。」

校門を抜けようとしたその時、

「竜一！」

麗奈が竜一を呼ぶ

「何だ！麗奈、何があった！」

「誰か走ってくるわ！どうする？助けるの？」

走ってくるのは7人。多分この人数ならばこのバスに収容可能なはずだわ。

「高砂！今からあそこにいる生存者を救助する。作戦コード００３だ！お前が追っ手を迎え撃つ間に俺が生存者をこのバスに誘導する！いいな。」

「ああ、分かった！」

ん？今神奈すごい怯えてか気が…、いや気のせいか。

「そこの人たちこのバスに避難してください！ここは安全地帯です！」

「追っては自分が迎え撃ちますから早くバスの中へ！」

そう言いながら高砂がコイルガンを構え、そして撃つ。

そして数分後

「いやー素晴らしいチームワークでしたね。ああ、申し遅れました私は御影　新堂。と・こ・ろでそこにいらっしゃるのはもしかして…、神奈さんでしょうか？」

「いえ…、人違いだと思いますけど…。」

神奈が怯えた表情で新堂を見つめる。

「そうでしょうかねぇ？どう見てもその目は神奈じゃないでしょうかねぇ？」

「人違いです…。」

「人違いならしょうがないですねぇ。」

「神奈、大丈夫か？」

「はい…、何とか…。でも、すこし……」

そう言った後、神奈は高砂の肩に体を体を預けそのまますやすやと寝息を立てた。

第１６話　３月２１日　午後４時２３分　光坂市中心区

「ここはさすがに街の中心だけあってやっぱり酷いわね。」

まさにこの世の地獄てっとこね。私が体験してきた中でもここはかなり酷い状態だわ。

ミーシャはそう心の中で思った。

ここは光坂市の中心区。必然的に人が集中する、もしこんなところでバイオハザードが起これば結果は火を見るより明らかである。更に現在は事故を起こした自動車などから漏れたガソリンなどに火が付き火災が発生。まさに地獄のような光景である。

「隊長、どうしますか。一応ビルにいる生存者は救出しますか？」

まあ、俺はあまり救出はしたくないがな。第一、こっちは四人しかいないんだ。それで何十人もの生存者を安全に誘導するのは不可能に近い。もし無理にそんなことをやれば十中八九俺たちは奴らの仲間行きだ。

「上からの命令は、可能であれば救助しろ。のはずだ高崎。だからこの場合は残念ながら不可能だ。だから非情な言い方だが救助は出来ない。」

だが、妙な気がするな。恐らく過去の事例から見てバイオハザード発生から１２時間以内の生存率は確か２０から３０％のはずだ。それを考慮するとこの街の人口は俺がいた頃は１５万弱だったはずだからどう考えても現時点で３万人は生存者がいるはずだ。それなら

日本はもっと部隊をよこしてもいいはずだ。なのに派遣されたのが俺たちだけなのはおかしい…。

「まあそれを聞いて助かりましたよ、。まさか、何百人も誘導するなんて無理な任務、自分はやりたくないですから。」

「零次、双眼鏡ないか？向こうに人影らしきものが見えた。」

まさか、奴らとかじゃないよな。もしそうだったらこりゃかなりヤバイな。

錬次がそう思ったのには訳があった。奴らは群れで行動するからだ。つまり、あれが奴らの群れだとしたら後ろにはほぼ無限の奴らがいる。そうなるのだ。

「あるぞ、こいつを使え。」

そう言って零次が双眼鏡を手渡す。

「さて、吉と出るか凶と出るか……。おい、嘘だろ！」

錬次が双眼鏡越しに見たその先には……、重武装の兵士がいた！

「何があったの錬次。」

ミーシャが尋ねる。それと同時に彼女の脳裏にはある言葉がよぎった。

「ああ、マズイな重武装の兵士が２０人ほどこっちに向かってきている。」

「それはどっちがか解る？」
それが自衛隊なら恐らく援軍ね。でも、ダークネス軍側だったら。
再び彼女の脳裏にあの言葉が浮かぶ。そう、出撃前日に聞いてしまったあの言葉が……。
「この任務であの戦犯を消すことができる。第一、奴の様な実験体はもっと早く処分するべきだった。」
この言葉を聞いた瞬間彼女は全てを理解した。今回の任務は私を殺すためだけの任務だと。
「残念だがダークネス軍だな、恐らく俺達を消しに来たんだろうな。」
状況は最悪だ。相手は２０人、それに対してこっちはたったの４人正攻法で行けば皆殺しだ。それに持久戦も通用しないだろう。
「そのことだけど恐らく狙いは私ね。」
「何？それは一体どういうことだ。一応、同じダークネス軍の筈だろ。」
「何言ってんのよ、馬鹿じゃないの高原。あいつらは仲間でも容赦なく殺すわよ。それに今回、私がここに来たのも遠回しに言えば殺されるためね。」
「ふざけんなよ……。隊長！あいつら全員皆殺しにしてやりましょう！」
ふざけんなよ……、ダークネス帝国！

「ああ、解ってる、勿論だ。だが、ひとつ聞きたいことがある、ミーシャお前、恐らく第3世代だな。」

「なんでそのことを……。そのことはダークネス軍の上層部しか知らないはずじゃ……。」

嘘でしょ、こいつなに者なの……。

「なぜ俺がその重要事項を知ってるかって？それは俺が元第2世代だからだ。」

まさかこんなところで第3世代と会うなんてな、正直驚きだ。まさかあんな非道な計画がまだ続いているなんてな。あの国はマジで狂ってやがる。

「まさか、第二世代は全員死んだ筈じゃ！」

嘘よ！生きてるはずがない第二世代は全員処刑されたはずよ。

「ああ、それはあくまで公式上の話だ。」

「一体何なんだ第2世代とか第3世代とか？」

「あまり俺達が触れていい話じゃなさそうだぞ高原。」

「ええ、そのようですね。」

「まあ、信じるも信じないもお前の自由だミーシャ。」

「だけどこの計画を知ってるってことは間違いなく第二世代ってことでしょ。」

「まあな。」

「隊長！敵が気づきました。撃ってきています！」
マズイ！ここは道のど真ん中だこんなところでじゅうげきせんをやるなんて自殺行為だ！早くどこかに隠れないと。
「隊長！指示を！」
隣のビルの影に身を隠しながら迎え撃つのが得策だな。いや、それしか策はないな。
「分かった！取り敢えず高崎はミーシャとそこのビルにに身を潜めながら敵軍を迎撃。錬次と俺はそこの左右のビルから狙撃。全員解ったか！」

「ああ、任せろ」
狙撃か、あの任務以来だな。まあ、腕は衰えてないと思うけどな。

「了解！」
あの、小生意気な奴とは一緒にやりたくないがアイツの腕は確かだ。まあ、今回は我慢するか。

「了解したわ。」
あの堅物と組むのは気に食わないけどアイツはかなりやるわ、しょうがないから今回は我慢してやるわ。

「さて、帝国軍。第2世代の恐ろしさをもう一度教えてやる。俺達は貴様らの道具じゃない、人間だ！」

第１７話　３月２１日　午後５時２３分　光坂市郊外（前書き）

かなり長いです。恐らく今までで一番長いです。

第17話　3月21日　午後5時23分　光坂市郊外

「我々は神に選ばれた存在ですから、今こそ一つになるべきなのです。」

バスの中ではかなり前（正確には学校脱出直後から）新堂の宗教じみた演説が続いていた。
その内容はまるでどこかのカルト宗教のようで一般人には到底理解しがたい内容だった。

「アイツ、狂ってるわね」

「ああ、ありゃまるでどこかの宗教の始祖様だ。」

「竜一、まるでじゃなくてそのまんま。しかも、あいつの取り巻きは、全員洗脳されかけてるわよ。」

「ああ、新興宗教新堂教とでも名付けるか？」

「でも、あまり好ましくない状況よね。」

「何でだ？」

「アンタ大丈夫？簡単にいえば新堂にとっては私たちが邪魔で仕方ないはずよ。」
このままだと洗脳されるか殺されるかどちらかだわ、早く策を練らないと……。

「つまりは早く対策考えろやと言うことか。」
まあ、とりあえずあいつを出し抜くことを考えるか。

「おや、そこの方々私の演説を聴かなくてよろしいのですか？」
こいつマジでヤバイな。
「テメェは馬鹿な演説してないで生き残る作でも考えてろや。」
秋名が新堂を挑発する。
「いいのですか本当に聞かなくて、聴けば死後より高い次元に転生できますよ。」
「悪いけど俺たちは死ぬ気は無いんでな。」
何が高い次元だ、俺達にはそんな妄想考えてる暇はないんだよ！

「ところで高砂、神奈はどうだ。」
あの様子を見ると新堂に何かされたんだな。あくまで俺の勘だが。
「ああ、幸いにもまだぐっすり寝ている。」
高砂の膝の上にはスヤスヤと寝息を立てている神奈がいた。
「なあ、竜一、俺にあの宗教家を出し抜くいい方法があるんだが聞いてくれないか？」
「ああ、教えてくれ。」

こいつに任せればなんとかなるな。いや、こいつならなんとかしてくれる。

「まずは、あいつを挑発してキレさせる。そのあと俺達はバスを降りる。」

「もしそこに奴らがいたらどうするんだ。」

「ここからがポイントだうまくタイミングを合わせて降りるポイントがちょうどお前の家に付くようにしてもらうんだ。どうだ？」

恐らくこれが一番リスクの少ない作戦だろう。

高砂にはこの作戦がうまくいく確信があった。それはこういう奴に限り自分の所属している宗教をバカにされたらすぐにキレるということだ。そこを上手く付けばいくら頭の切れる奴だろうと落とすスキができる。

「ああ、挑発は高砂お前に任せたぞ。俺は万が一に備えとく。」

「ああ、バックアップは任せたぞ。」

バックアップは竜一に任せる。それが高砂と竜一流、勝利の方程式だ。物理戦においては高砂がバックアップを役を勤め、竜一が敵を切り崩す。心理戦においては高砂敵を切り崩し、竜一が万に一つに備えてのバックアップを務める。この戦法で二人は数々の修羅場をくぐり抜けてきた。

「竜一、あとの細かい設定はお前に任せた。なるべく俺が動きやすいようにしてくれ。」

「ああ、任せとけ。作戦開始は俺の家が近ずいたらだ。」

「了解。」

同日　午後５時５７分　バスの中

「かの偉大なる始祖はこう言いました！人は団結してこそ真の叡智に達する。いいですか？貴方たちも私と共にあれば叡智に至ることができるのです！」

もう２時間近くも演説続けてるぜ、あの気違い。

秋名が思ったように、バスが学校を出てから新堂の宗教勧誘演説は一度も止んでない。普通の人間ならバスの中と言う密室でこんな狂った演説を何時間も聞かされたら、まず正気では居られないだろう。しかし、ここにいる５人は違った。彼らは奴らという未知の生命体を相手に戦い。ここまで生き延びてきたのだ。あの状況に比べればこの程度の演説は大したことない、５人は皆がそう思っていた。

「高砂。」

竜一が小声で高砂を呼ぶ。どうやら作戦開始の合図のようだ。

「ＯＫ、見事な演技期待してるぜ。」

「おや、どうしたのですか、糸魚川くん？もしかして気づいたのですか、我々が唱える叡智の素晴らしさに！」

まんまと引っかかったな。バカめ。

「ええそのとおりです。私はようやく気づいたのですよ。真の叡智というものに。それはあなたそのものです。」

さてと、まずは油断させてからっと。

「高砂！正気に戻れ！そいつに従うな！」

高砂の野郎、相変わらずの名演技だな。流石は元演劇部。

「笠木君。糸魚川君は正気なのだよ、むしろ私の目から見ると君たちの方が正気ではないのだよ。彼は叡智に目覚めたのさ。」

「テメッ！何が叡智だ。貴様がやっているのはただの洗脳だ！」

こいつ、マジで逝ってるな。

「麗奈、君も早く叡智に目覚めなよ。そうすれば如何なる苦難も乗り越えられる。」

「高砂！アンタ自分が何言ってんのか解ってんの！ふざけないでよね！」

高砂が演技上手だってことは竜一から聞いてたけどまさかここまでとはね。

あれ、知らない人が見たら間違いなく新堂と同類よ。

「しかし、新堂様、貴方は何か神奈氏と関係をお持ちで。もしかして彼女が運命の使徒なのですか？」

こいつは聞き出さないとな。神奈の様子を見たら絶対こいつと何か関係がある。

「糸魚川君、君は実に優秀だね。そのとおりだよ、彼女こそが我々の叡智の結晶なのさ。」

ビンゴだな。さてと、確信に迫るとするか。

「ならなぜ彼女の体にはあれほどの傷があるのですか？叡智の結晶であるのならば本来はもっと丁重に扱うはず。」

「ああ、それは、彼女が叡智達するのを拒んだからなのだよ。私たちが崇拝する真の叡智とは魂であり肉体ではないのだよ。つまりは」

「いかに肉体が傷つきようとも生きている限りは彼女は我々汚れなきの叡智で有り続ける。ということですね。」

「物わかりがいい。そのとおりなのだよ。」

ふざけんな、テメェの馬鹿な振興のせいで神奈は……。何が叡智だ！神奈が運命の使徒だと？馬鹿な妄想も大概にしろ！

「竜一、聞きたいことは聴き終わった。作戦を第2段階荷移すぞ。」

高砂がアイコンタクトで合図を送る。

「了解。」

「つまりは魂こそが真の叡智なの……」

「先輩！あんな人たちに騙されないでください！」

参ったな、予想外だ。まあ、想定の内だが。

「何を言う、運命の使徒よ。」

「先輩！あんな人たちと一緒にならないでください！先輩ならどんな困難でも乗り越えられます！だから心を強く持ってください！」

もう嫌だ！大切な人を巻き込むのは……。だから先輩だけは……、先輩だけは何としても私が！

神奈……。

まさかここまで健気だったとはな。こりゃマジで俺が寝返ったと思ってるな。そういえばこいつにこの作戦のこと話してなかったけ……。

「何を言っている！運命の使徒よ！貴様はただ我々の使徒であればいいのだ！なんならもう一度再教育してもいいのだぞ？」

「嫌っ…、こめんなさい、再教育だけは…、再教育だけはお許しください……。」

再教育の記憶がよほど恐ろしかったのか、神奈はその場に蹲り声を殺して泣いている……。

「ならば大人しく我々に…」

「竜一、作戦変更だ。」

再びアイコンタクトで竜一に指示を送る。

「ああ、構わん。むしろ思いっきり頼む。」
竜一もアイコンタクトで指示を返す。

「高砂！目を覚ましやがれ！人を傷つけるのが叡智な訳がない！そんなものはただの妄想だ！」
さて、神奈を泣かせた罪は重いぞ、新堂よ。高砂、あとは任たぜ。

「ああ、俺が間違ってた。そんなもんは叡智でもなんでもないよな。」

「貴様！裏切るのか！」

「何だと？誰が裏切るだ？こんな狂気じみた宗教に飲み込まれかけた自分が恥ずかしいぐらいだ！こんなもん裏切られて当然なんだよ！」
新堂、テメェの器は見切った。神奈をお前らの道具にはさせない！

「ふざけるな。貴様、我々の叡智を否定するのか。」

「神奈を泣かせた奴に叡智を語る資格なんてねえんだよぉぉぉ！！！」
その時高砂の何かが切れた。

第１７話　３月２１日　午後５時２３分　光坂市郊外（後書き）

次回、ＶＳ新堂戦完結です。（多分）

第１８話　３月２１日　午後５時５８分　光坂市郊外

「貴様！よくも我々を！ここまで愚弄したなぁぁ！」

新堂の野郎、完全にキレてるな俺が思うにはそろそろ手が出るな。いざというときに備えておくか。

そう言うと竜一は振動に勘かれないようにコイルガンを構えた。

「何が愚弄だ！そんなことを貴様に言われる筋合いなどない！」

本当に自己中というか狂ってるな。こりゃもう救いよう無いな。

「貴様、そんなにその小娘が大事か？いいだろう叡智を失うのは痛いが構わん……。殺してくれるわ！！」

そう言うと新堂は小瓶を取り出しその中に入っていた薬を口に放り込んだ。

「竜一！」

「おう！任せろ！」

そう竜一が言い放った直後、彼の手に握られたコイルガンから大量の弾が吐き出された。

が、しかし……。

「そんなもので我が叡智の塊を砕けるとでも思ったのか！」

コイルガンの弾は全弾新堂に当たったが、しかし彼はそれを正面から打て止めてみせたのだ。

「何っ、嘘だろ……。」

まさか、コイルガンが効かないだと……。こりゃかなりピンチだな。

「おや、どうしたのかね？さっきまでの威勢はどこへいった！！」

「クソっ、ならこいつはどうだ！」

恐らくこいつなら奴にダメージを与えることが出来るはずだ。

そう言うと竜一は咄嗟にコイルガンを麗奈に渡し、単発式改造ロケット花火ガンを構えた。

もちろん中に入ってるのは対変異体用の特殊弾、彼はこうなることを予想して事前にこの弾を作成したのだ。

「喰らえ！対変異体用の特殊弾だ！」

放たれた特殊弾は見事新堂に命中しそのあとに爆発を起こした。その爆炎は敵の体を貫くように一直線に伸びた。

「どうだ、殺ったか。」

これで倒せなきゃマジでヤバい。高砂はそう確信していた。この弾は強力な貫通弾だ。

約１６００度の熱が体を貫く。命中すればまず命はない。

「解らん、だが、殺れたことを願おう。」

「ほほう、少しはたのしめそうだな…。」
そこには無傷の新堂が立っていた。
「何！まさかあれほどの攻撃を食らって、無傷だと！」
嘘だろ。こんなことあるはずが……！高砂の脳裏に最悪の結果が過ぎった。
「次はこちらの番だ。とくと叡智を味わうがいい！」
「ガッ……。」
「錬次！」
それは一瞬だった。新堂は強化された瞬発力を使い、錬次に猛スピードで突撃。
そのまま錬次をバスの外へ吹き飛ばしたのだ。
「クソッ、秋名！バスを止めろ！」
マズイな、錬次の野郎このままだとマジで殺されるな。
「了解しました！」
そう言うと秋名はバスのブレーキを思いっきり踏みバスをドリフトさせた。
その勢いに任せ高砂は思いっきり車外に飛び出た。そしてその勢いのまま……。
「食らいな！」
そう言うと高砂はバスから放り出された時の勢いのまま新堂にドロップキックを食らわせた。

「クソッ……。」

とっさの攻撃に反応しきれなかった新堂は、その勢いに耐えれずかなりの距離を吹き飛ばされた。常人ならこの攻撃を受ければおそらく大怪我だが今の彼の身体は超人の域にありこれほどの攻撃を当てても吹き飛ばすのが精一杯だった……。

「錬次！大丈夫か！」

「ああ、腕を少しやられただけだ。」

「この程度で私に勝ったつもりですか？」

クソッ、もう回復してるのかよ！コイツは恐らく正攻法だとキリがないな。

さて、どうするかな。

「このままでは何時までも私に勝つことはできませんよ。」

「クソッ、化け物め……。」

こいつ痛みを知らないのか、いや、厳密に言えば痛みを感じないのか。だとすれば厄介極まりないな。

「高砂…、どうするんだ？こいつマジで強いぞ……。」

大誤算だな……、俺としたことが。

「こいつだけは使いたくなかったがな、竜一、ここは俺に任せてくれ。」

「馬鹿か高砂！お前一人どうにかできる相手じゃないんだぞ！」
まさか、高砂のやつ死ぬ気か…。
「いや、俺に任せるんだ。何としても勝ってみせる！」
「ああ、俺もこいつを潰してやりたかったが今回はお前に譲ってやる。ただし、絶対に負けんなよ！」

番外編その3　世界観設定　用語解説（前書き）

用語解説です。順次追加してきます。

番外編その３　世界観設定　用語解説

世界観
今作の世界の設定は１９９９年7月1日に世界同時多発バイオハザードが、２０００年１０月9日にダークネス帝国によるアジア侵略が起きた世界が舞台になっており、第一話開始時は２０１５年3月２１日となっている。

政府機関
２０１５年現在、日本政府の統治範囲は北は北海道、南は愛知、岐阜、福井の一部までとなっており、その先は世界同時多発バイオハザードにより発生した奴ら、変異体及び、ダークネス軍侵攻後より現れた未知の生命体の巣窟となっておりとても人の住める環境ではなくなっている。
尚、この地帯のことを俗に（旧世界）と呼ぶ。

ダークネス帝国
２０００年に突如現れた謎の帝国。かなりの危険思想を持っており、自国のためなら、虐殺人体実験なども躊躇しない。現れてそうそうアジア各国に戦争を仕掛けた。一説には宇宙人との噂があるが定かではない。国内では沖縄から九州、四国そして本州の兵庫までを統治範囲としている。尚、現れた時期などを考慮すると宇宙人である確率が高い。

ダークネス軍
ダークネス帝国直下の軍隊。兵力は日本には２０万程度、全世界では７００万程度である。
かなりの新型兵器を保有しており非常に強敵。軍のスタイルは陸軍と空軍を主体としており、海軍は二の次としか見ておらず海軍では

未だに戦艦が現役である。しかし、それでも戦艦には大量のミサイル類などが搭載されておりかなりの強敵である。

世界同時多発バイオハザード
１９９９年7月1日に発生した世界規模のバイオハザード。この事件で奴らと化した人間は日本で４０００万人、全世界では２５億人になると予想され、間違いなく人類史上最悪の厄災となった。
このバイオハザード後も小規模なバイオハザードは多数あったが、今回のバイオハザードは１９９９年以来最大規模であり１９９９年をも凌ぐ規模との説も。

光坂市
茨城県にある人口２０万人ほどの中規模都市。近くに日立の本社があるせいか町の産業はほとんどが日立関連である。市内にはビル街なども在りこのあたりの地方の中心都市である。都市のモデルはＣＬＡＮＮＡＤの光坂市。なお、旧世界にはかなり近い都市であり、まれに旧世界の住民が物資の購入のために訪れる。

県立光坂高校
高砂達が通っていた学校である。この町の中心に位置し生徒数も９００名を超え学校の敷地内に寮なども完備しているかなり規模の大きい高校。なお、ＣＬＡＮＮＡＤの光坂高校とは違いこちらは進学校ではない。

旧世界
１９９９年のバイオハザード後、放棄された場所。現在は関東周辺と近畿地方が主な旧世界である。
どのような状態にあるかは詳しく調査されてなく（危険すぎて調査が行えない。）一応無人地帯にはなっているが情報によると関東エリア旧世界では５０万人弱、近畿エリア旧世界では６０万人弱が生

活しているとの事である。
なお、このエリアは奴ら、変異体、そしてダークネス軍侵攻後より現れたミュータントが生息しており、政府では特級の危険地帯となっている。

ブラドー隊
海上自衛隊の精鋭特殊部隊であり、正式な名称は海上自衛隊第7師団所属、非常時早期対処特殊部隊第2中隊所属、第7ブラドー隊となっている。任務は非常に過酷を極め、その内容はバイオハザードの早期対処、帝国への諜報活動などと非常に危険なものばかりである。それゆえかこの特殊部隊の任務死亡率は非常に高い。この部隊に入る資格としては高い戦闘センスと確かな実績が必要であり、零次と錬次は教団事件での実績を買われ入隊、高崎も別の事件での実績を変われ入隊した。なお、武器の自由所持が認められている。

第１９話　３月２１日　午後６時０５分　光坂市郊外（前書き）

久しぶりの投稿です。恐らく、しばらくはこのペースでの投稿になるかと。

第１９話　３月２１日　午後６時０５分　光坂市郊外

「竜一、バスの中に居る新堂の信者たちを潰しといてくれ。生死は問わない。」
もし、新堂の信者達が暴れ始めたら厄介だ、何をしでかす変わらない。

「あいよ、こっちは任せてお前は自分の仕事をこなすんだ。」
高砂、頼んだぞ。奴はお前じゃないと倒せない。

「ああ、そのつもりだ。」
任せろ、神奈のためにもこの戦い、負けるわけにはいかねぇ！

「もう遺言はよろしいのですか？なら、レクイエムと行きましょうか。」

「あ？何言ってんだ、俺を殺せるとでも思ってんのか？」
残念だがこの力を使えば貴様程度なら殺せる。新堂、死ぬのはお前だ。

「おやおや、随分と強気になりましたね。ですが、強くなければ所詮ハッタリ、その強気がいつまで続くやら。」

「フン、勝手に言いやがれ。」
さて、速攻で蹴りをつけてやる。

そう言うと高砂は人間とは思えない速さで新堂に迫った。

「クッ、早い！」
こいつ一体何物なんだ……。
「俺がなんだって、そうだよ俺は普通の人間じゃない。俺は元第３世代だ！」
とうとうバレちまったか、この忌々しい力が、でも今はこの力のおかげで神奈を救える！
「なるほど、その身体能力もそのせいか、だが第２世代ならともかく所詮は失敗作の第３世代、その身体能力は長く続かない筈だ。」
「ならそれまでに蹴りを付けるまでだ！」
俺の力は、持って５分か、クソッ、恐らく勝率は５０％か……。
「オラッ！」
高砂が回し蹴りを食らわせる。
「フン、遅いな。」
同時に新堂も蹴りをかわす。
「クソッ、なかなか当たらねえ。」
マズイな、後４分か。
「どうやら、我が叡智には敵わないようですね。もう降参したらどうですか？」
「黙れ！俺は絶対に屈しない！」
その時

「先輩！伏せてください！」
そこには弓を持った神奈がいた。
神奈は高砂が弓の軌道からそれた瞬間にその弓から矢を放った。
「マズイ！奴は俺の弱点を！……。」
今の新堂には余裕の表情はなかった。その表情は本気で焦る顔だった。
そして、その弓の起動は確実に新堂を捉えていた。
「マズイ！あの弓は確か炸裂弾だ！」
嘘だろ！いくらなんでも……神奈、まさか俺を巻き込む気か！
咄嗟に高砂は物陰に隠れた。そしてその直後、炸裂弾は見事新堂に着弾し、ゼロ距離で大爆発を起こした。
「クソッ、相変わらず竜一製の弾は威力だけは高いな……、味方も巻き込みかねないのが偶に傷だが……。」
だけどこれで新堂には相当効いたはずだ。恐らく倒せるまでは行かなくとも俺の攻撃が当たるぐらいまでは……。
「なかなかやりますね……。」
そこには左腕を失った新堂の姿があった。特殊弾を使ってもほとんど無傷だった新堂にあれだけのダメージを与えた神奈の弓の腕も確かだが弱点って一体、いや、そもそもあいつには弱点自体があるのか？いや、待てよ、もしかしたら。
高砂の頭の中にある考えがよぎった。

「神奈！もしかしてこいつの弱点は関節か？」
恐らくさっきの攻撃も矢が関節にあたったんだろう、いくら体を強化してもそういう類のダメージは避けられないだろう。

「はい！彼の弱点は関節です！」
多分、先輩の速さなら機動力の落ちた彼程度なら多分倒せるはずです。

「運命のお使徒よ、貴方は私たちを裏切るのですのね？それならよろしいでしょう。殺して差し上げましょう。それが我々が使徒様に対しての最善の施しとなるでしょう。」

「神奈！こんな奴の言いなりに何かなるな！絶対に神奈は俺が守ってやる！」
もうこいつには絶対に辛い思いはさせない！神奈は、神奈だけはぜったに俺が守り抜いてみせる！！

そこには大切な人を守ると心に誓った、一切の迷いの無い高砂の姿があった。

「先輩、もう私は過去には怯えません。私は運命の使徒なんかじゃない、私は美琴…、美琴神奈です！」
先輩…、先輩のおかげで私、過去と決別できました。そして今度は……、先輩とずっと一緒に居たいです。だから、今度は私が先輩を助ける番です！

「ほう、自ら選ばれた地位を捨てるのですか？」

「選ばれた地位、そんなものなんていらない！先輩とずっと一緒に

入れるなら私わただそれだけでいい！」

「神奈、お前の意思は分かった。なら一緒に戦おう！」

まさか、お前の意思がそんなに強かったとは……、正直驚いたぜ。

「はい！」

「よくも…よくもあれだけ良くしてやったのに……、神奈、貴様はこのあとじっくり再教育してやる。」

「もうそんな脅しには乗ならないわ、だって私と先輩は絶対に勝つから！」

不思議なことだけど先輩となら負ける気がしない。

「小娘が……、戯言を！！」

「神奈！連携攻撃で行くぞ！援護は任せた！」

頼もしいな、あれだけの弓の名手が援護してくれるならこっちも１００％の全開モードで行ける。

「まずは貴様からだ、糸魚川高砂。我叡智の名のもとに、死ねぇぇぇーー！！」

新堂が猛スピードで連続蹴りを繰り出す。

しかしさっきとはまるで別人のような動きで高砂はそれを躱す。

「誰が死ぬかよ！」

驚異的な速さで攻撃を躱した高砂はそのまま瞬時に反撃に移る。

「グッ…、」
何だこいつ、さっきとはまるで別人だ……。
「私もいるわ！」
高砂の反撃と同時に神奈も弓を放つ。そしてその弾道は新堂を確実に捉えていた。
「ガッ……、」
クソッ小娘の分際で……。やはりあいつから殺すか……。
そう言い放つと新堂は神奈に拳銃を向けた。
「死ねぇぇ！」
しかし……。
「俺はまだ戦えるぜ！」
竜一がロケット花火ガンを放ち神奈への射撃を阻止する。だがその射撃は先程までの射撃とは違い確実に敵の一点を狙い、撃っていた。
「クソッ、負け犬の分際で小賢しい！」
我が叡智がいやそんなことはありえない！叡智こそが絶対なのだ！
「進藤さんよ、上がガラ空きだぜ！」
秋名が操るラジコンヘリからありったけの弾薬を吐き出される。
「バカめ、そんな物容易く躱せるわ！」
やはり、叡智に至らぬ者はどこまでも愚かだな。
「麗奈！」

「分かったわ高砂！」

麗奈と高砂が連携攻撃をかける、その攻撃は神奈の時とは違い、後方からの援護ができない代わりに威力は非常に強力なものであった。

「いいだろう、皆殺しだ。」

愚かなやつめ、この力に勝てるとでも？

新堂は真っ向から勝負に出るつもりだ。

「喰らいなさい！」

麗奈がナタを振り下ろす。

「馬鹿め、遅いんだよ！」

攻撃を躱した新堂が麗奈にカウンター掛けようとする、しかし麗奈の攻撃こそがオトリだ。

「油断したな！今度はガードする暇はないぜ！」

「まさか、止めろ！」

「誰がやめるかよ！」

高砂が新堂にありったけの攻撃を食らわせる。そしてその攻撃は確実に関節を捉えた。

そして……。

「クッ、おのれ！よくも…、よくも我が叡智を！」

マズイ、次は無いな。私としたことが。

新堂は瀕死の重症だ、だがこっちももう……。この勝負引き分けか……。

「おい、何か忘れてないか高砂、まだコンボは終わってないぞ。」
いよいよだ。あのラジコンヘリから飛ばした弾薬があと数秒で新堂に降り注ぐ。

「ああ、そうだな。新堂お前の負けだ！」

「何を言っているのですか？私は……」

その瞬間、弾薬の雨が降り注ぎ新堂を焼き尽くした。

数分後

「どうやら完全に倒せたようね。」
ギリギリだったわね。もう数分長引けば恐らく……。

「ああ、ところで高砂、体は大丈夫か？」
あの野郎、恐らく限界を超えてるな。

「ああ、かなりマズイかもしれない……。」

そう言った瞬間、高砂は眠るように倒れた。

「先輩！」
そんな、先輩が……、今度は私が先輩を助ける番だったのに……。

何で……。

神奈の目に涙が浮かぶ。

「大丈夫だ神奈。高砂先輩は限界を超えただけだ。死んではいない。」

「ああ、そのとおりだ、コイツはあの状態で無理をしすぎただけだ。安静にしてれば問題ない。」

まあ、そろそろ俺もヤバイけどな。早く家に行くか。

「ホントですか！よかった……。」

神奈も安心したのか高砂に寄り添うように倒れた。

「あら仲のいいことね。」

本当こっから見てると兄弟みたいね。

「麗奈、冷やかしは後にしてこいつらを運ぶのを手伝ってくれ。」

「わかってるわよ。」

「さて、早いうちに家について休むとするか。」

第２０話　３月２１日　午後６時０８分　光坂市郊外（前書き）

かなり中途半端です。見切り発車ですいません。

第２０話　３月２１日　午後６時０８分　光坂市郊外

「ミーシャ、錬次、中を調べろ奴らがいたら撃って構わん。」

「了解！」

「分かったわ。」

ミーシャと錬次が住宅の中に入る。その住宅は典型的な日本家屋で特徴は門が頑丈なのと周りが石垣ということだ。これなら奴らが押し寄せてきてもある程度までは持ってくれる。だが、中に先客が居たらここの確保は厄介だ。間違いなく揉め事が起きる。

建物の中

「ミーシャ、そっちはどうだ？」

庭のほうは特に何もなしっと。世の中平和が一番だな。

「こっちも特にないわ、でも何かいるわ、ただ一つ言えるのは間違いなく奴らではないから安心して。」

意外ね、これだけ籠城に持って来いの建物に人一人いないなんて、でもさっきからなにか気配を感じるのよね。まあ、いまは問題ないわ。

「ああ、早く零次に安全を報告しよう。」

「ええ、それに私も早く休みたいわ。」

さっきの戦闘でもうクタクタだわ、しかもパートナーがあの堅物人間だし。

「零次、誰もいなかったぜ。ただ、ミーシャ曰く何かの気配がするらしいが奴らではないからとりあえず大丈夫だ。速いところ休もうぜ。」

「ああ、とりあえず今日はここで休もう。三回も戦闘をやった後だ。これ以上は俺も無茶はしたくない。」
実際まだ動けることは動けるんだが、正直これ以上は部隊の士気の低下にのつながるしな。

午後6時18分

「じゃあ、監視は3時間交代で行う。ああ、それと高崎、食料はあったか？」
そして腹も減ったな。早く高崎のやつに旨いもん作ってもらおう。

「ああ、軽く3日分はあった、それにかなりいい食材だ。こいつは腕が鳴るぜ！」
黒毛和牛、大間のマグロ、フォアグラ、これだけのの食材があればすげえ料理ができるぜ！
なぜ俺がこんなにテンションが上がってるかって、それはこの俺の趣味が料理だからだ！

「ならフルコースを頼んだぞ。」
高崎の料理は船の中では評判だからな。この前うちの料理長が高崎を欲しがってたっけ。

「あら、こんな堅物に料理ができるのかしら？」
きっとこんな堅物が作った料理だからきっと味も硬いはずだわ、私あんまり硬い味は好みじゃないのよね。

「一応言っておくがミーシャこいつの料理の腕は俺が保証するぞ。こいつが作ったものは料理店で出せるぞ。」

「れっ、錬次がそう言うのなら、たっ、食べるわよ。」
まっ、まさかね。こんな堅物に料理ができる訳ないわよね。
まさか、こいつツンデレなのか？
高崎は心の中でそう思ったが口に出すとまたミーシャが怒るのであえて口には出さなかった。

「ああ後、ミーシャもうすぐ風呂が沸くから先には入れ。」

とりあえず風呂は女子が優先だよな。これ、社会のルール。

「分かったわ錬次。でも絶対に覗かないでね！」
まったく錬次ならやりかねないわ。別に覗くほどの物なんて持ってないんだからね！

「ああ、覗かない覗かない。」
実は少し覗きたいんだがそんな事をしたら殺されるからな。

「じゃあ俺は上で見張りに行くからな。高崎、料理は頼んだぞ。あと誰か情報収集をしといてくれ。」
さてと、何事もなければいいんだが……。

午後６時５０分

「こいつは酷いな。東海地方はほぼ全滅とみていいな。」
まさかここまで被害が拡大してたとはな、それに俺たちのいる新関東地方も酷いな……。

「錬次、何しているの？」

「ああ、ミーシャか、取りあえず情報収集だ。って、おい！その恰好！」

俺が振り向くとそこにはメイド服姿のミーシャがいた。

「ああ、これね。来るときに来てた服が汚れて洗濯してるから手頃にあった服を着てるだけよ。」

「だからってメイド服は！」
マズイ、こいつ、かなり可愛い……。マジで俺のタイプだ……。

「あら、錬次、照れてるの？なんなら言ってあげようか、ご主人様って。」
錬次……。意外な趣味ね。今度はスク水にしてみようかしら？

「いっ、いや、別に俺は、言っ、言ってもらわなくてもいいぞ！」
実はご主人様って言われたいです。だが、だがな！そんな事言わせたらまるで俺が変態みたいじゃあないか！だからここはあえてスルーだ！

「じゃあ、お兄ちゃんはどう？」

「それも却下だ！」
なに！メイド服でお兄ちゃんだと！！それは、最強のコンボじゃないか！だが、高崎にもしそれが聞こえたら絶対あとでネタにされる！だから俺はあえて断る！

「錬次、顔真っ赤よ。言ってほしいのバレバレよ。」
錬次、間違いなくシスコンね。それもかなり重症の……。

「ああ！分かったよ！言って欲しいですよ！ご主人様ともお兄ちゃんとも！言って欲しいですよ！」
もう！何なんだよ！こいつは！やっぱ俺、こいつ嫌い！

「錬次、まさかお前がそんな趣味を持っているとは知らなかったぞ。」

無線機から零次の声が聞こえる。

「れっ、零次！聞いてたのか！」

「というか錬次、お前無線機の通信ボタンオフにしてなかったろ、さっきからメイド服がなんだとか聞こえたんだが……。」
まあ、大方予想はついてるんだがな。でも、このままもっと弄ってやったらもっと面白いことになるな。

「いっ、いや、それは、幻聴だ！」
マズイ、零次にバレた。あいつ間違いなく船に戻ったらこの話広める気だ……。

「いや、確かに聞こえたんだが一応録音してあるし……。」
まあ、この通信機にはそんな機能は無いんだが。
「なあ、零次…、俺の秘蔵コレクションやるからお願いだから広めるのだけは勘弁してくれ……。」
「しょうがないな、じゃあお前の武器庫にある南部十四式拳銃で勘弁してやる。」
「分かったから、とにかく広めるのだけは勘弁してくれ！この前もお前のせいで俺ロリコンと勘違いされかけたんだぞ！」
「ああ、分かった分かった、広めないからとにかく戻ったらくれよ。」
イェーイ！錬次の秘蔵コレクションゲット！

時間は少し飛び　３月２２日午前０時４５分
「星が綺麗ね。星を見るには最高の夜だわ。」
皮肉なものだわ。街の明かりがないと星はこんなにも輝くものなのね。
屋根にはこの時間帯の見張りを任されたミーシャがただ一人、満天の星空を眺めていた。
そう、仲間たちは今どこで何してるかと考えながら。
「一人で何やってるんだミーシャ。」
そこには片手に酒を、片手につまみを持った錬次がいた。

「何って、見ての通り見張りよ、見張り。アンタこそどうしたの、こんな時間に？」

「ああ、無性に酒が恋しくなってな。久しぶりに飲みたくなってな。それにこの満天の星空だ。飲むにはもってこいだろ。」
それにしても星が綺麗だな。こんな綺麗な星空は久しぶりだな。

「それが本当の目的じゃ無さそうね。」
何かもっと別の用事があるはずだわ。

「まあ、実を言うとそうなんだがな。」

「で、要はなんなの？」

「ああ、そのことなんだが特に大した用じゃないんだが、なんとなくお前とは初めて会った気がしなくてな。」

「あら、私はつい昨日アンタと初めて会ったのよ。」

「いや、零次の野郎から聞いた話だと俺とお前は過去にあってるらしんだ。もちろん零次ともだ。」

「私が零次と、多分あり得ないわ。あの人は１０年前に死んだ事になってたはずだから、それに私はずっと帝国の特殊強化施設にいたのよ。会うことなんてまずあり得ないわ。同じ理由でアンタとも会うことができないはずよ。」
たぶんそれは人違い。あの施設は外に出ることさえ許されない施設よ。同じ施設にいない限り会うことは不可能なはずだわ。

「それが零次の話だとお前は幼少時代の記憶が無いらしんだ。」

「何で分かったのよ。たしかに私は小さいころの記憶が無いわ。でもそんな事をどこで聞いたのよ？」

まあ、過去の記憶については極力私も考えないようにしてるわ。記憶が無いって事はそれだけ耐え難い記憶のはずだからね。

「ああ、俺もついさっき思い出したんだがとある事件で確かにお前を助けたはずだ。確か６年前の教団事件だ。」

第２１話　３月２２日　午前０時４５分　光坂市郊外（前書き）

また見切り発射です。

第２１話　３月２２日　午前０時４５分　光坂市郊外

「６年前の教団事件？何よそれ、もしかして私の記憶と関係しているの？」
その教団については大体予想はつくけど、私が小さい頃にその教団にいたなんて信じられないわ。

ミーシャは錬次に言われたことを半信半疑で聞いていた。それもそのはずだ、突然失っていた記憶について知らされたのだ。いきなり信じろという方が無理だ。

「ああ、大有りだ。６年前になるが俺達はその教団の大規模なアジトの情報をつかんだんだ。当時はその教団による児童誘拐事件が多発していてな、あの仲の悪い帝国との日本が共同の摘発作戦を行なったんだ。」
そういえばあの任務が俺の初任務だったよな。あの時だったよな俺と零次が初めて合ったのも
あの時はまだ零次が帝国の軍人で俺が新米の自衛隊員だったよな。

この任務が自分の人生を大きく変えた任務だと思いつつ、錬次は教団事件の過去を懐かしそうに振り返っていた。

「あの敵同士の日本と帝国が共同で……。まさかそれって！帝国重要施設襲撃事件のこと？」
まさかね、でもそれ以前なら手を組む事も有り得るわ。確かその事件を機に帝国軍は今の洗脳兵士が中心になったのよね。

ミーシャの言うとおり、その事件を機に帝国は軍事体制を大きく変

える事を余儀なくされたのだ。その責任として帝国では、この事件は軍の一部の反帝国派が帝国転覆のために起こした、帝国の重要施設襲撃事件として本来称えられる筈の参加した兵士たちに汚名を着せることにより解決している。

「ああ、そのとおりだ。だが、こっちでは少し呼び名が違うな正式にはＧＧ教団、高松支部摘発作戦だ。」

なるほどね、帝国はその教団と手を組んで人体実験をやっていた事実を死を覚悟して戦った名誉ある兵士に汚名を着せることによって隠したのか、ダークネス帝国……、心底救いようのない外道共だ。

「やっぱりね、帝国は隠してたんでしょ。自分たちもその教団と一緒になって罪のない子供たちに非道な人体実験を行なっていた事を。」

国民ながら呆れるわ、そんなことがもし外部に漏れれば国を揺るがす大スキャンダルになることも知らずこんなバカな事をやった帝国に……。そのぐらい賢くない私でも分かるわ。

「だろうな。そんなことがバレた日には帝国は国連軍の総攻撃を受けるだろう、人体実験は国連法で最も重い罪の一つだしな。」

実際、過去の事件でも虐殺を行なった国が国連軍に滅ぼされてるからな。

「ええ、で、もう大体察しはついたけど。そこで人体実験されてたんでしょ。私は……。」

ミーシャの表情が曇る。

「ああ、違うと言いたいが現実はそのとおりだ。多分記憶がないのもその辺のせいだろう。」

あんまりこいつは語りたくない事実だからな。人体実験なんて聞いていい気分になる奴なんてほとんどいないだろう。

「ならなんで助かったの？恐らくそこに居たなら私はもうとっくの昔に死んでるはずよ。」

多分この力もその実験の仕業のはずね……。私はこんな力は望んでいなかったのに……。

「恐らくそのままいたなら死んでたな。だがお前が死ぬ前に俺達がその教団の支部を一斉摘発してお前を助けたんだがな。そのおかげでお前はいまここにいるんだ。」

だが、助かったのはミーシャを含めて僅か7人だったな……。俺達がもっと早く動いていれば……。

錬次の表情が曇る、彼は6年前の事件をまだ悔やんでいたのだ。そう救えるはずだった幼い命を救えなっかった事に。

「でも、助かったのはほんの一部だったんでしょ……。」

私も思い出したわ。過去の事。ハッキリとじゃないけど……。確かに私は何処かの施設で人体実験の非検体になっていたわ。そしてそこでたくさんの仲間を失った……。

「ああ、お前を含めて確か7人だった筈だ。だが、2人は助けたあとに死亡が確認された。残りの3人に関しても未だに意識不明だ。」

仲間から聞いた話だと俺が摘発した支部はまだマシな方だったらしい。酷いところだと兵士が吐くほどの状況だったらしいからな。

「つまり、その教団事件の生き残りは2人だけってことね。もう一人は確か」

「ああ、第一世代の実の子だ。」

「そして、そいつはこの街にいる。ミーシャお前がこの街に来たもう一つの理由、それはそいつに会いに来たんだろう。」

「ええ、大当りよ。私はスイスの一件で死んだ隊長からその子への手紙を私に来たのよ。」

「そうだとは薄々は感づいていたけどな。なら話は早いそいつの居場所を教えてやる。」

「まさか、その子の居場所を知ってるの！」

「ああ、高崎の従兄妹がそいつと同じ学校に居る。俺の感が間違ってなければそいつはきっと高崎の従兄妹と一緒に脱出したはずだ。」

「なんでわかるの？」

不思議だわ、そんな事わかるはずもないでも不思議と説得力があるわ。

「零次がそういう能力を持ってる奴を感知する力があるからな。確か零次が言うには確かにそいつの力を感知したと言っていた。だから間違いないだろう。」

「分かったわ、錬次。なんだか解らないけどアンタが言うと信じれる気がする。だから今回はアンタを信じるわ。」

第２２話　３月２１日　午後６時５５分　光坂市　竜一宅

「高砂、体はもう大丈夫なのか？」
竜一が心配した様子で高砂に尋ねる。
「ああ、取り敢えず無理をしない限りはもう大丈夫だ。」
まあ、この先新堂クラスの敵と戦う事は殆どないだろう。まあ、仮に今すぐ戦闘を行うことになったら無理はしないように俺はサポートに回るしな。ひとまずは安心だろう。
「竜一、神奈の様子はどう？」
心配だわ、神奈あんなに怯えた表情してたし……。
「ああ、ベットに寝かせてある、特に外傷はないし熱もない。問題はないだろう。」
不幸中の幸いだな。全員大したケガも無かった。俺も運良く骨折は免れた。
「取り敢えず神奈はあのまま休ませておこう。変に起こすのも可哀想だ。」
後で様子を見に行くか、あいつ俺のために必死に戦ってくれたからな……。
「そう言えば秋名はどこに居るの？まさか外には居ないわよね……。」
あの馬鹿ならやりかねないわ。
「ああ、アイツならコイルガン片手にベランダに見張りに行ったぞ。

高砂、後で食いもんをもってってやってくれ。俺はこれから情報収集をしないといけないから手が空かないんだ。」

「ああ、分かった俺はあっちで武器の補充をしておく、さっきの新堂との戦いで大分弾を消費したからな。竜一、弾の予備はどれぐらいあるんだ。」

多分こいつの事だから少なくても１０００発ぐらいは有るだろう。というよりこの先はそのぐらいの弾がないと正直辛いな。

「ああ、コイルガンの弾が確か１５００発弱と改造ロケット花火が８００発弱あったはずだ。」

まさか俺の趣味で作ったものがこんなところで役立つとはな。取り敢えず今はコイルガンと改造ロケット花火銃は俺達の生命線だ。当分の間は主力武器として活躍するだろうな。

「あまり満足できない数だな。俺の見積だと持って1週間だな。」

多分満足な戦闘ができるのはこれよりもっと短い期間だけだろう。恐らく2、3日程度だ。

「やっぱりそのぐらいしか持たないか……。早く自衛隊とかと合流しないとな。」

まあ、この辺境の街に自衛隊が来る確率は低いけどな。

「ああ、取り敢えずお前は自衛隊の展開状況と被害状況を調べてくれ。」

「ああ、了解だ。」

「じゃあ、私は料理でも作ってるわ。竜一、キッチン借りるわよ。」

さて、麗奈特性の料理を作ってあげるわ。

「ああ、頼んだぞ。」

午後7時５０分

「竜一ー！高砂ー！晩ご飯よー！」

家の中に麗奈の声が響く。

「おう、今行くぞー！」

やっと飯の時間だ。マジで腹が減ったぜ。まあ、情報収集もいい感じに終わったしな。

ここで俺が今までに集めた情報に付いて話そう。まずは被害状況からだ。今回のバイオハザードのせいで新関東はほぼ壊滅と見ていい、更に東海地方でもバイオハザードの余兆らしき事態が置き始めている。恐らくこの先自衛隊は新関東最大の都市である御天市への救援、そして今回のバイオハザードの発生源である床主市での奴らへの掃討戦を行うだろう。つまり現状としてはこの街に自衛隊の救援に来る確率は限りなく０に近い。

「分かった。今行く。」

麗奈が作った飯か、一体どんな味なんだ？

武器の方は上々だな。マガジンもひとつの武器に付き１０個以上もあった。これでもし大規模な奴らの群れと合ってもそう簡単には負けないだろう。それにあの野郎、とんでもないもんを家に隠したたぞ。

高砂の手にはスナイパーライフルが握られていた。形から見ても間違いなく実銃だ。
あの野郎、マジでバイオハザードが起こると思ってたんだな……。
まあ、実際に今起きてるがな。

「さあ、食べて。」
どんな反応をしてくれるかしら？まあ、さっき味見したときは不味くは無かったから多分大丈夫だとは思うけど。
テーブルには麗奈が作った色取り取りの料理が並んでいた。見た目はかなりり美味そうだが
さて味の方は？

「コイツはかなりイケるな。」

「ああ、竜一。食通の俺が食べても文句のつけようがない。」
意外だこの見るからに料理をさせたら焦がしたりアレなモノを作りそうな麗奈がまさかこんな旨いモンを作るとはな。正直驚いたぜ。

「そんなに美味しい？私はいつも家で作るのと同じように作ってみたんだけど。」

「ああ、最高だ！」
こいつの料理があれば俺達はいつでも高い士気を維持できるな。

「べっ、別に嬉しくなんかないんだからね！」

麗奈がどこかの恋愛ゲームのツンデレキャラがよく言いそうなセリフを返す。

「まあ、麗奈がツンデレだって事は分かったし、竜一そろそろ本題に入るぞ。」

「ああ、だが麗奈がツンデレは不要だぞ。」

第２３話　３月２１日　午後８時０５分　光坂市　竜一宅（前書き）

かなり短いです。

第２３話　３月２１日　午後８時０５分　光坂市　竜一宅

「ああ、現状はあまり好ましく無いな。恐らくこの街に自衛隊が来ることはない。もし仮に来としてもそれは俺たちが死んだあとだ。」残念だがこれが現実、つまりは俺達は自力で脱出しなければならない。

「もし、脱出するとしたら何処のルートから脱出するつもりなの？竜一」

麗奈が尋ねる。

「ああ、脱出するとしたらルートは３箇所ある。１つ目は新光坂にある汐橋を渡って御天市に抜けるルート。２つ目は下里区にある、雪音橋を渡り、床主市へ抜けるルート。最後はかなりの掛けだが港へ行き船で海に抜けるルートだ。」

「んー、どれもかなり危ないわね。ちなみにこの中で一番安全なルートはどれなの？」

私としては２つ目のルートがいいわね。床主市ならここから２０ｋｍちょっとしか離れてないしもし、竜一の言うとおり掃討戦があるなら間違いなく自衛隊がいるわ。

「どれも安全とは言えないな。まず１つ目のルートは距離が遠すぎる。２つ目は敵の中心に突っ込んでいくようなもんだ。３つ目は遭難の危険性がある。」

「それに時間もない。」

「どういうことだ高砂、やっぱり武器の関係か？」
確かに現状の武器だともし変異体とかが来るとかなりヤバイな。
「確かに武器の関係もあるがそれより問題は諸外国だ。もしこんな事態が外国でも起こったらどうする。恐らく国連の常任理事国は核発射の準備をするだろう。」
実際２０１２年の時にも核は発射されたしな。
「確かに……。ねえ、竜一、もしかしてほかの国でもこんなことになってるの？」
もしそうだったら早くこの町から脱出しないと。
「ああ、こいつばかりは知っててても言わないつもりだったがバイオハザードは外国でも起こっている。」
「クッ……。そいつはかなりマズイぞ。」
恐らく核を撃つとしたら早ければ今日、遅くても一週間以内に撃つ確率が高い。もしそうなったとき一番怖いのはＥＭＰだ。俺達の武器の殆どは電気を使っている。もしそいつらの回線が焼き切れた場合それは死を意味する。
「ああ、早くこの街から脱出よう。」
「ええ、それしかなさそうね」

第２４話　３月２１日　午後９時１１分　光坂市　竜一宅　ベランダ（前書き）

中途半端な投稿ですいません。

第２４話　３月２１日　午後９時１１分　光坂市　竜一宅　ベランダ

「秋名、交代の時間だ。休んでいいぞ。」

「はい、高砂先輩。ところでその肩に背負っている袋はなんなんですか？」

もしかしてあの袋の形は、いや、そんな物はまずないか……。あったらそれこそ大事だ。

「ああ、こいつか、なんだと思う？ヒントは危ない物だ。」

竜一の野郎、なんてもん隠してるんだよ。コイツは間違いなく、イギリス軍制式採用のスナイパーライフルだぞ。

「まさか、銃ですか！。しかもその形を見る限りは恐らくライフルですよね。」

キター！チートアイテムがキター！これならどんなやつが来ても安心だ！

「ああ、だがお前が考えてる様な銃とは少し違うかもな。お前の考えてる銃は恐らくアサルトライフルだと思うが。今回はスナイパーライフルだ。」

まあ、素人が使う分にはスナイパーライフルの方が使い勝手がいいだろう。素人にフルオートの機能を使わせるのは弾の無駄使いだしな。あんな機能は正直弾幕を貼るときしか役に立たなからな。

「ってことは、ＰＳＧ－１とかですか？」

燃えてきたぜ！まさか実銃を使えるなんて思ってもいなかったぜ！

「いや、詳しいことは俺にもあまりよくわからん。」

そう言って高砂は袋から銃を取り出す。その形状は軍用スナイパーライフルというよりは競技用のスナイパーライフルに近い形状だった。

「これって！もしかして……、ＡＩ　Ｌ９６Ａ１ですか！」

萌えるわー、この形状、そして、この使いやすさ！まさにプライスレス！

「ああ、そうなのか……。悪いが俺は銃にはあまり詳しくなくてな、取り敢えずお前がそういうのならばきっとそうなんだろう。」

こいつ、もしかしてミリオタとかそういう類か……。

「ところで先輩、先輩はこのバイオハザードをどう見ますか？」

まあ、自分としてはこのバイオハサードはどこかの帝国の一部の上層部がやらかしたと考えている。

「まあ、俺としては帝国の一部の馬鹿どもがやったと考えている。」

「ええ、それが一番妥当な筋ですね」

「取り敢えず今は監視は俺に変わって秋名はゆっくり休んでおけ。」

「ええ、ならここは先輩の御好意に甘えとく事にしてきますよ。」

同日、午後１１時３０分

「ヤバイ、眠い。」
やっぱりあの戦闘の後だと疲れるな。まあ、交代まで後１５分ぐらいだから何とかなるだろう。

「高砂、交代に来たわよ。」

そこにはまるでどこかの特殊部隊の様な格好をした麗奈がいた。

「麗奈、その格好はどうしたんだ。それにそこのホルスターに入っている銃は本物か？」
まさか、いや竜一の家だ、ガチで本物の拳銃かもしれない。

「ああ、これね。これは服が洗濯中でロッカーにあったやつを借りただけよ。それとこの拳銃は持ってみたら重かったし多分本物よ。」
私も初めのうちはビックリしたわ。本物の銃なんて触ったこともなかったから。

「多分そいつはグロック１８だぜ。まあ、銃については俺より秋名とか竜一の方が詳しいけれどな。」
まあ、銃に詳しくなくてもこのぐらいは分かるけどな。

「……、ねえ高砂、これって間違いなく銃刀法違反よね。」

「ああ、少なくともコイツはの日本国内では所持は不可能だ。」

「そうよね。」

同日１１時４５分

「取り敢えずこの双眼鏡でも見とけ、早くこの状況に適応するんだ。」
取り敢えず俺はこんな惨状には慣れっこだからな。一応男性陣は全員この状況に慣れたが、一応いつ何があるかわからないから、女性陣も慣らしたほうがいいな。

「なによ、……えっ……なにこれ……。」
そこには阿吽絶叫の地獄が広がっていた。

「これが現実だ。生憎だがこれよりもひどい場所はいくらでもある、現に俺たちの居た光坂高校はまだまだ人間同士の抗争が起きてないだけまだ序の口だ。」
さっき某動画サイトで見た動画の中には麗奈たちに見せたら間違いなく気絶するようなものもあったからな。

「でも……、これは今ここで起こっている現実なのよね。」
私も馬鹿じゃないから分かるわこれが現実ってことぐらい。

「ああ、俺も信じたくなかったがそのようだな。まあ、ここは今すぐにはあんな状態にはならないだろう」
そうあると信じたいな。

第２４話　３月２１日　午後９時１１分　光坂市　竜一宅　ベランダ（後書き）

高砂「なぜ投稿まで１週間もかかったんだ？」

作者「いや、ちょっとゲームに夢中になっちゃってね、あははは。」

麗奈「それはどう言うジャンルのゲームなのかな？作者さん？」

作者「げっ、麗奈。」

神奈「黄竜さん、まさかそれってそういう類のものじゃないですよね？」

作者「そっ、そんなわけないじゃないか！僕は健全な日本国民だよ。」

秋名「嘘をつけ、どこがこのゲームの健全なんだ？」

「ガラガラガラガラ。」←ゲームが箱から出される音

作者「ゲッ、それは！」

竜一「こいつのどこが健全なんだ？こりゃ間違いなく１８禁のゲームだろ」

作者「いっ、いやそれには深い訳があって！」

一同「嘘だ！」

作者「嘘じゃない！」

竜一「じゃあ俺がそのゲームを貰う」

作者「なんでそうなるんだ！てか……。」

一同「「貰うな！！」」

第２５話　３月２２日　午前２時１５分　光坂市　竜一宅（前書き）

最近バカな作者の投稿がいつも中途半端ですが、どうか生暖かい目で見守ってください。

ｂｙ竜一

第２５話　３月２２日　午前２時１５分　光坂市　竜一宅

３月２２日午前１時２３分　竜一宅　ベランダ

「取り敢えず敵の能力は大体把握出来たな。」
取り敢えず今までの状況、そしてネットから仕入れた情報を照らし合わせると。まず奴らには噛み付く以外の攻撃方法は存在しない。もうひとつは奴らは走ったりはしない。これはこっち側にとっては大きなアドバンテージだ。こっちは走ることができる。それに飛び道具がないとなるとまず近づかなければ安全だ。

「何一人で考えているんだ竜一、気持ち悪いぞ。」
こいつ、さっき神奈達に内緒で作者から盗んだゲームやってたからな。もしかしてそれに毒されたのか？

「いや、つい、さっきやったゲームのヒロインの胸が、イヒヒ……、って、違うわ！」
こいつ俺をはめたな。確かにさっきやったゲームのヒロインの胸は大きかったけどよ！今考えていたのはそんなことじゃねーよ！！

「いや、少しは考えてたろ、いや間違いなく。」

「すまん、少し考えてた。」
こいつ……

「で、どうなんだお前の考えではこの街からの脱出は可能なのか？」
俺はこの街からの脱出成功率は５０％程と見ている。

「まあ、正直なところ運次第だな。一番大きい運要素は奴らの数、そして変異体の発生確率だ。」
まあ、一番の要素だよなコレ。

「たしかにな、奴らの数によって成功率は大きく左右されるからな。」
俺もそう踏んでた。俺の見積だとこれから会う奴らの数が５００体未満ならほぼ確実に脱出が可能だな。だが、逆にそれ以上となるとかなりきついのが現状だ。

「ああ、だがこれだけの武器があるんだ。少しぐらい無駄撃ちしても大丈夫だろう。それに奴らの群れと戦えば適当に撃っても当たるだろう。」
群れと変異体とは絶対に戦いたくないけどな。

「だな、まあ、そう言う不吉なことは考えないでおこう」
こいつがこういうこと言うとマジで起きそうだから正直怖い……。

同日　午後2時15分

「後3時間ちょっとで夜明けだな。高砂、お前寝なくていいのか。」
こいつには休んでもらわないと困る。もし俺たちが変異体と戦うことになったら対抗できる力をもっているのは元第3世代のこいつだけだ。

「馬鹿、寝れねーよ、俺も寝たいけど目が覚めて酷いんだ。竜一、酒ないか？」
未成年は飲酒禁止？そんなもんこの壊れた世界では関係ねーよ。

「アホ、二日酔いになったらどうする。俺はお前のゲロの処理なんてゴメンだぞ。」
まあ、あるにはあるんだが、たった今こいつには酒を飲ましてはいけないことを思い出した。なぜかって？高砂の野郎は酒を飲むと頭のネジが飛ぶんだよ！

「じゃあいいよ、寝ないからそれよか竜一ちょっと双眼鏡貸してくれ、ちょっと気になることがあってな。」
まさかな。いや、そんなことはありえないか。

「ああ、構わんぞ。ホイ、双眼鏡。」
竜一が双眼鏡を手渡す。

「ああ、ちょっと借りるぞ。」
さてと、確かあの家だな。どれどれ……、マジかよ……。クソ共め！

「どうした高砂？」
こいつ、まさかキレてるのか？

「竜一、射撃、いや銃殺許可をくれ。目標はここから7件先の民家の奴らだ。」
高砂の声には明らかに怒りが篭っていた。

「何があったんだ高砂、訳を話してくれ。許可はそれからだ。」
こいつかなり切れてるな。冷静さを失いかけている。

「こいつを見れば分かる。いいから早く覗け。」

高砂がドスを聞かせた声で竜一に双眼鏡を手渡す。その声は普段の高砂からは想像もできないものだった。

「ああ、分かった。だからそんな怖い顔しないでくれ。」

高砂、顔がマジで怖い……。

竜一が双眼鏡をのぞき込む。

「ふざけんなよ……。あの家の住人は腐ってやがる！」

竜一がのぞき込んだ双眼鏡の先には家の庭に一人の少女がいた。どうやら一人だけ外に追い出されたようだ……。そしてその少女は窓越しに親から罵声を浴びせられている。更に運が悪いことにその罵声におびき寄せられた奴らが少女に近づいている。

「俺がキレてる理由が分かっただろ。」

「ああ、取り敢えず全員を叩き起こせ。俺も頭に来た。あの家族を皆殺しにするぞ！こっちも総力決戦だ！」

そう言えばこの前もあの子はまだ寒い中で一人外に出されていたよな。それに今年の冬は道端に倒れていたのを俺が見つけて家に連れてったら……。

「親にその子が殴られたんだろ。」

「何で分かったんだ。」

「お前の考えていることぐらいお見通しだ。」

なら話は早い。あの親共は運が悪いな、この俺をここまでキレさせるとはな。絶対に命はないと思え！

第２５話　３月２２日　午前２時１５分　光坂市　竜一宅（後書き）

高砂「いよいよシリアスな場面に突入だな。」

作者「まあ、取り敢えずシリアスな場面は俺としても何回かは欲しかった
からな」

竜一「本当はもっと早く入れる予定だったんだよな。」

作者「まあ、本当は新堂戦で入れたかったんだがあのシーンはバトルメイ
ンでやったからな。」

麗奈「要するにまだシリアスなシーンを書くだけの能力が鳴っかったわけ
ね」

「グサッ！」←作者の心に何かが刺さる音

竜一「おい、作者、大丈夫か？」

作者「大丈夫だ……、問題ない……。バタッ……。」

秋名「救急車ーー！！」

第２６話　３月２２日　午前２時１７分　竜一宅

「おい！秋名起きろ！戦争の時間だ！」

竜一が秋名を叩き起こす。

「何！戦争だと！よし殺ってやるぜ！武器はどこだ！」

いよいよこの時が来たぜ！早くラジコンヘリの飛行準備をしないとな！敵はどこだ！

うわ、秋名、恐ろしく単純だこいつ。

「まあ、落ち着け秋名、今回の作戦はかなり難易度が高い作戦だ。おまけに時間も余りない。」

参ったな、やる気が有るのはいいけど今のこいつだと保護対象まで攻撃しかねないな。それに今回の作戦の成功は秋名の操縦の腕にかかっているからな。

「一体何なんですか！もしかして奴らがここに攻めて来たのですか！」

まさか、いや第一こっちに奴らがくることはほぼありえない。今奴らが集まる可能性が大きいのは今避難者が一番詰めかけている雪音橋だ、それにここは閑静な住宅街、さっき見張りをしていたときは奴らの数は数えるほどしか居なかった筈だ。

「だから落ち着け秋名、取り敢えず作戦の概要はベランダで話すからとりあえず来い。」

「ハイル・ヒットラー！！」

同日　午前２時１７分

「よし、神奈以外は全員来たな。時間がないから手短に話すぞ。今回の作戦は救出作戦だ。救出対象は１名、場所はここから１００ｍほど離れた民家だ。作戦配分は竜一、麗奈がベランダからの援護射撃、秋名は家の屋上でヘリの操縦、必要に応じて攻撃だ。そして俺が突入を担当する。尚今回は民家にいる住人には射殺を許可する。」今回の作戦は正直危険が大きすぎる。だからこそ俺は今回の作戦あえて１人で突入する。そうすれば作戦が失敗したとしても犠牲は俺一人で済む。

「その民家まではどうやって行くつもりなのあの家は奴らに取り囲まれてるわ。」

冷静を失ってるわね、今の高砂は……。大丈夫かしら？

「あの家までは竜一の家の車庫にあるランエボで突っ込む。そのあとは俺がなんとかする。」

まあ、最悪ランエボが突っ込んだ時に廃車になっても俺にはあの力があるからな。まあ、なんとかなるか。

「なら取り敢えず急いだほうがいい。あの家の門はもう長くはもたないぞ。」

俺がさっき見た限りはあの家に奴らが押し寄せてた。つまり時間はほとんど無いに等しい。

「よし、今すぐ作戦に取り掛かるぞ！もはや一刻の猶予もない！」

何としても救い出してやる！だからもう少し待ってるんだ！

同日　午前２時１９分　竜一宅　ガレージ

「よし、エンジンがかかったな準備は万端だ。」

高砂が無線機を取り出す。

「こちら高砂、竜一、聞こえるかこっちは準備ＯＫだ。援護射撃を始めてくれ。」

「了解した。射撃を開始する。第一目標は門周辺に居る奴ら。第二目標は住居内にいる住人でＯＫだな。」

「ああ、だが第一目標を重点的に狙ってくれ。」

「ＯＫ。ではこれより援護射撃を開始する」

同日　同時刻　竜一宅　ベランダ

「よし、始めるぞ。」

「分かったわ竜一。」

そう言うと麗奈はコイルガンを構え奴らの群れに攻撃を開始した。

「秋名！援護を頼む！目標は門の前にいる奴らだ！」

屋上

「了解しました！火炎瓶で火の海にしてやりますよ！」

さて、いよいよ俺の本領発揮だな。頼んだぜ俺の盗撮用ラジコンヘリよ。

そう心の中で呟き秋名はラジコンヘリを発進させた。

同日　午前２時２３分　竜一宅　ガレージ

「よし全ての準備は整ったな。あとは俺が助けにに行くだけだ。」

そう高砂が呟いていると

「先輩……、どうしても行くつもりなんですね。」

そこには神奈がいた。

「ああ、悪いけど今回ばかりは神奈が行くなと言っても行くつもりだ。だから止めないでくれ。」

恐らく神奈は俺を止めに来たんだろう……。残念だが今回は神奈に止められても行くつもりだった。

「分かっています。止めに来たんじゃないんです。先輩とと一緒に居たいからここに来たんです。」

それは普段の神奈からは考えられない言葉だった。

「分かった。だが、いつ死んでもおかしくない状況だってことだけは覚えといてくれ。」

正直、俺は今の冷静を欠いた状態だと神奈を守りきれる自信がなかった。だが、神奈の目を見た瞬間俺は悟った、こいつは冷静さを欠いた俺を必死に守ろうとしてることを。

「もちろん覚悟はしています。だからこそです！」

「その気持ち、しっかり受け取ったぞ。」

同時刻　ベランダ

「こちら高砂。ガレージと門を開けてくれ。それと突入は神奈も随伴することになったがいいか？

「分かった。オーダー一名追加と門の開放だな。任せろ。」

そう言うと竜一はリモコンを取り出し、スイッチを押した。

「こっちは任せておけ高砂、だから絶対に戻ってこい！」

第２７話　３月２２日　午前２時２０分　敵宅（前書き）

執筆進まず約２ヶ月。やっとの思いで投稿です。

第２７話　３月２２日　午前２時２０分　敵宅

「行くぞ神奈！しっかり捕まってろ！」

俺はそう言うとランエボを全速力で発進させた。

「先輩！とっ、飛ばしすぎです！いくらなんでも！ぶっ、ぶつかります！」

神奈がそういったのも無理はない。このランエボの最高出力は４００馬力だ、加速力ならレーシングカーにも引けを取らない。現に発進してからたった一秒で６０ｋｍに達している。

「心配無用、任せておけ。」

そう言うと高砂はブレーキを踏み車体全面に加重を移しハンドルを切った。そうすると車体は横にスライドしドリフト走行となった。

「危なすぎます！ぶつかったらどうするんですか！」

「悪かったよ神奈、でもあの群れの数だと強行突破をかけるしかなかったんだ。」

まあ、神奈の言うことの方が正しいんだけどな。

「まあ、先輩の言うことは分かりますけど……、普段はやめてくださいよ。」

「大丈夫だ。普段はこんな無茶な運転はしない。」

正直、実際はやりたかったです。

「約束ですよ。」

「わかった、取り敢えず着いたから準備してくれ。」

さて、一仕事するか……。

「先輩、あの子の保護は私に任せて先輩は先輩の仕事を果たしてください。」

「ああ、任せとけ。あとお前にも一応無線を渡しとくから何かあったら報告してくれ。」

「分かりました。」

午後2時25分　住宅街

ピンポーン！俺は家のインターフォンを押した。だが応答はない。

「まあ、当然といえば当然の結果だよな。しょうがない、無理やり開けるか。」

俺はサバイバルナイフを鍵に向かって振り下ろした。勿論、普通のナイフなら鍵を壊すことは出来ない。でもこいつは厚い鉄板にでも穴を開けることができる特注品だ。鍵ぐらいはどうってことないだろう。

そうして俺はナイフを2、3回振り下ろした。そうするとバキッっという音を立てて鍵が壊れた。

「お邪魔しまーす。まあ、当然の結果だよな。」
そこには包丁などで武装した住人がいた。だが見た限りは大した敵ではない。

「なんだね君、そのドアの開け方は！警察を呼んで欲しいのかね。」
馬鹿かこいつ、もう警察は機能してないつーの。
「はあぁ？警察、なにそれ？美味しいの？」
「君！それが人に物を言う態度なのかね！」
「じゃあお前はそれを言える立場なのか？俺は見たぜ、てめえがガキを家から締め出してる様をな！」
こいつマジで外道だな。
「君！そのこととこのことが何の関係があるのかね！」
「は？テメェ何したのかわかってんのか？」
俺はコイルガンを構えた。目的は勿論やつを殺す為だ。
「あの子はうちの子では無いのでな、悪いが捨てさせて貰ったのさ。」
「前言撤回しろ。」
「何？」
「聞こえなかったのか？前言撤回しろ。撃つぞ。」

「やれるものならやってみなさい！そんなことをしたら警察は黙っていないぞ！」

「撤回する気は無しか、残念だな。」

俺はコイルガンの引き金を引いた。だが敢えて当てない、つまり、威嚇射撃だ。

「ヒッ、」

「次は当てるぞ。」

「なっ、何をするのかね君！」

無線がなった。恐らく竜一だろう。

「なんだ竜一、変異体が現れたのか？」

「弾の消費が激しい。早く戻ってきてくれ。」

「分かった。」

無線機を切る。

「最早討議の余地はないな。死ね」

「なっ、何をする！」

俺はコイルガンの引き金を引いた。

「ぐあぁぁ！」

男の悲鳴が響く

「それだけの悲鳴を上げたなら間違いなく奴らは反応するだろうな。まあ、俺はかんけいねーけど。」

さて、これで俺の役目は終わったな。取り敢えず長居は無用だから戻るか。

「神奈、こっちの用事は終わった。ここにはもうすぐ奴らが来るはずだから早いとこ引き上げるぞ。」

「分かりました先輩。ところでこの子はどうするんですか？」

少女は神奈の肩ですやすやと寝息を立てていた。

「もちろん連れてくしかないだろ。後、竜一にその子を近づけるなよ、あいつはロリコンだから。↑勿論ウソ」

「ろっ、ロリコン……。」

「神奈、嘘だ。あいつはロリコンじゃない（多分）」

「竜一先輩はロリコン……。」

駄目だ完全に別の世界に言ってやがる。後で誤解をとかないとな。

「竜一、聞こえるか。こちら高砂、」

「何だ？新手が来たのか？火力支援の準備はできているぞ。」

「ああ、今回ばかりは朗報だ。ミッション完了だ。あとは戻るまで

の援護は頼んだ。」

「了解！」

番外編その４　武器紹介（前書き）

とりあえずオリジナルの武器と紹介です。

番外編その４　武器紹介

コイルガン（アサルトライフル）

改造前		改造後（第１段階）	
威力	Ｅ	威力	Ｄ
命中率	Ｄ	命中率	Ｄ
装弾数	Ｃ（３０発）	装弾数	Ｂ（５０発）
携帯性	Ｃ	携帯性	Ｃ
連射性	Ｃ	連射性	Ｂ
隠密性	Ｂ	隠密性	Ｃ
範囲	単体	範囲	単体

射撃方式　フルオート・セミオート

オプションパーツ　スコープ

竜一作のコイルガン。（初代）一応合法らしい（竜一曰く）威力、連射性共に初期装備としてはそこそこであり普通の奴ら、対人用としては申し分ない。しかし所詮民製品を使った手作りなので遠距離での運用は難しい。秋名の手によって改造が施され、装弾数・連射性・威力が向上した。専用の銃架を使用することで軽機関銃の様な取り扱い方もできる。

コイルガン（サブマシンガン）

威力	Ｅ
命中率	Ｅ
装弾数	Ｄ（２０発）
携帯性	Ｂ
連射性	Ｃ

隠密性　B
範囲　単体
射撃方式　フルオート
オプションパーツ　無し

竜一作のコイルガン。（二代目）威力はアサルトライフルタイプよりかなり落ちており、至近距離から打たないと敵に致命的なダメージを与えることができない。ただ連射性能はアサルトライフルタイプより一段上で至近距離での戦闘に適している。尚、サイズが小さく携帯性に優れているのもこのコイルガンの強みの一つである。

コイルガン（ハンドガン）
威力　E
命中率　E
装弾数　E（8発）
携帯性　A
連射性　D
隠密性　A
範囲　単体
射撃方式　セミオート
オプションパーツ　無し

竜一作のコイルガン（三代目）今作はいざという時の為の護身用に作ったため、非常にコンパクトである。しかし、携帯性を最優先にして作ったため威力は最弱クラスであり連射機能も搭載されていない。

コイルガン（スナイパーライフル）

威力　D
命中率　C
装弾数　E（10発）
携帯性　D
連射性　D
隠密性　B
範囲　単体
射撃方式　ボルトアクション
オプションパーツ　スコープ

竜一作のコイルガン（四代目）今作のみ高砂との共同開発。今作はある程度の遠距離での運用も出来るよう、バレルを長くし命中精度を向上させた。今作のみ高砂作の射撃補正機能が搭載されている。このシステムにより遠距離でもある程度の運用が可能となった。

改造ロケット花火ガン（タイプ、アサルトライフル）
威力　D（通常騨）C（炸裂騨）
命中率　D
装弾数　C（30発）
携帯性　C
連射性　C
隠密性　C
範囲　単体（通常騨）範囲　小（炸裂騨）
射撃方式　フルオート
オプションパーツ　スコープ

高砂作の改造ロケット花火ガン。一応試作品であるが威力だけではコイルガンを凌駕しており専用の炸裂弾を使用した場合、威力は銃弾にも匹敵する。欠点は弾薬が火薬などを増量したロケット花火の

為、非常に運用コストが高い事。尚、炸裂弾は小規模であるが範囲攻撃が可能である。

特製打ち上げ花火
威力　B～E
命中率　A（攻撃範囲が非常に広いため）
装弾数　F
携帯性　F
連射性　F
隠密性　D
範囲　広域　特大
射撃方式　手動でセット
オプションパーツ　スコープ

竜一作のロケットランチャー。上空に発射させて使う。上空で爆発を起こし、地上に大量の鉄片、ガラス片を振りまく。さらにこのランチャーにはガソリンと灯油の混合液体が入っており爆発の際に引火し地上を火の海にする効果もついている。攻撃範囲は非常に広く奴らの群れを一掃する事が可能。威力以外と攻撃範囲以外はほぼ無に等しい。

第２８話　３月２２日　午前６時１５分　竜一宅

「準備はいいか。」

「こっちも準備ＯＫだ。そっちはどうだ高砂。」
さすがにあの騒ぎを起こしてここに居たら間違いなく生存者が集まる。そうすれば奴らも集まる。つまり全滅ってわけだ。

「ハッチの準備は完了だ。あとはコイルガンをセットするだけだ。コイルガンの改造は終わったのか？」
俺はあの後、徹夜でランエボを改造していた。というよりは無理矢理させられた。しかも屋根を改造してハッチをつけろとの事だ。おかげで昨夜は一睡もしていない。

「ああ、それなら秋名に任せた。多分完成してるはずだ。後、使う車はランエボ二台でいいか？」

「ああ、それが一番ベストだろう。燃料はどうなんだ？」
確かどっちとも燃費は最悪だ。だからこそ燃料には気を遣わないといけない。

「ああ、燃料は大丈夫だ。一応予備のタンクも持っていく。」
確か家に予備の燃料が１００？ぐらい有ったはずだ。これだけあれば市内を脱出するまでは十分だ。

「だが問題は弾薬だな。」

「ああ、残弾はどのぐらいあるんだ？」

「コイルガンの弾が９００発弱、ロケット花火が６００発弱ってところだ。」

「やっぱり昨日の戦闘が原因か？」

確か報告だと弾薬の３分の１を使ったはずだ。多分昨日のペースで使うと４０～５０分で弾切れのはずだ。

「ああ、多分な。まあ、いざという時は強行突破しかないだろう。」

車ならある程度の奴らなら轢いて強行突破ができるだろう。

「ああ、そのつもりだ。俺も奴らはなるべく轢いてやろうと思ってたんだ。」

「それと高砂。中心区は通過しない方が無難だ。昨日の夕方あっちの方で銃声がした。しかも数百発レベルでだ。」

俺が危惧しているのは中心区が奴らで溢れ返っているというのも勿論あるが一番恐れていたのは奴らではなく銃を撃った奴らだ。数百発レベルで撃ったということは恐らくフルオートの銃を持っているはずだ。じゃなければあんな銃声はしなかったはずだ。

「どこかの軍隊が来たのか？」

まず自衛隊という線は多分ないだろう。たしか自衛隊は床常市に戦力を集中させているはずだ。

「軍隊なら恐らく帝国軍だろうな。」

「たしかにその線が一番現実性があるがそんなことをして帝国に何のメリットがあるんだ。」

「恐らくは細菌兵器の資料集めだろう。仮にこの現象を起こす兵器があったらある意味核兵器以上の抑止力になるだろう。」

「なるほどな。まあ、中心区を通らない限りは安全だろう。」

「ああ、それに資料集めだけなら今日中には撤退するだろう。それにもし自衛隊に見つかったら交戦するだろうし帝国側としてもそれは望んでいないはずだ。」

「もし俺達が帝国軍と戦ったら勝てる確率はどのぐらいだ？竜一。」

十中八九、帝国軍と交戦することはないだろうが、万に一つに備えてこのぐらい知っといてもいいはずだ。

「状況にも依るが仮にこっちが先制攻撃を加えられたとしても良くて2割ってところだ。ほかの状況で戦ったら勝率は0と考えたほうがいいぞ。」

「ちなみに万が一勝ったとして戦利品は？」

相手は軍隊だ。勝てば最低でも銃の一梃や二梃ぐらい手に入ってもおかしくないはずだ。

「アサルトライフル、拳銃、サブマシンガン、弾薬、食料、通信器といったところか。あと稀に狙撃銃とロケットランチャーってところだ。」

「なるほど、勝てばかなりデカイな。だがそいつを聞くとますます勝てる気がしなくなってきたぜ。」

まあ、予想はしていたけど流石は正規軍だ。どうやっても今の俺たちでは勝てそうにないな。だがやはり戦利品が実銃ってのがデカイな。もし実銃があれば変異体とやりあっても十分に戦える筈だ。

「まあ、極力は戦闘を避けたい、今回ばかりは相手が相手だからな。それにこっちは素人だ、正面から張り合っても勝てる要素はひとつもない。確かに勝てば大きいがリスクが大きすぎる。」

それに相手は軍隊だ。もしかしたら装甲車の類まで持って来ているかもしれない。もし装甲車が来たら俺たちは数分であの世だ。

「やっぱり先頭はしないほうが無難か、竜一。」

「ああ、間違いないだろう。」

第２９話　３月２２日　午前８時　竜一宅

「各員準備はいいか？」

「ＯＫだ。コイルガンの調子も上々だ。高砂。」

「ヘリの方もメンテナンスはバッチリです。高砂先輩。」

「食料も問題ないわ、高砂。」

「ライフルもバッチリ扱えるようになりましたよ先輩。」

「そう言えば神奈、昨日助けたあの子はあのあとどうなったんだ。とりあえず今は寝ているようだが」

昨日俺が見に行ったときはまだ目を覚ましていなかったが……。

「それならあの後しばらくして起きてましたよ。それで自分の名前は高月凛だって言ってましたよ高砂先輩。」

起きたときに私の見た限りは傷はそんなに深くなかったしとりあえずは一安心かな。

「凛ね、いい名前だ。さてと、そろそろ出発するか、竜一、先導は任せたぞ。」

ちなみに今回はエボ５とエボ７でこの街からの脱出を図ることになった。ちなみに乗っている奴はエボ５に竜一、秋名、神奈、凛。エボ７には俺、麗奈だ。ちなみにエボ５の車体にはハッチを取り付けて、いざというときにはコイルガンを発射できるように銃架を設置した。

「ああ、任せとけ。目的地はとりあえずは床常でいいか？」

「ああ、あの街が一番自衛隊が来る確率が高いからな。」
実際俺たちの装備だとそこまで長い間持たないのが事実だ。一番の得策は手っ取り早く自衛隊に助けてもらうのがベストだ。

「秋名、一応安全なルートを選ぶが恐らくかなりの奴らが居るはずだ。少し早いがスタンバイしてくれ。」
とりあえずこいつに見張りを任せておけばとりあえず安心だろう。

「了解。発砲許可は？」

「もちろん与える。奴らは見つけ次第射撃だ。」

「任せてください。必ずやってみせます。」
さてと、新型コイルガンのトライアウトも予て対物射撃と行くか。

３０分後　光坂市　住宅街

「竜一先輩！奴らの群れです。距離３５０、数５０です！」
このぐらいの数なら車載のコイルガンで一掃できるな。でもこの距離ならかなり弾が散らばるか……。

「任せろ。距離１００まで接近したあと、お前は車載の銃で攻撃、俺と神奈で狙撃をかける。」
あとは高砂への連絡か……。

ランエボ7の車内
「竜一、何があった？」
無線から竜一の声が聞こえる。

「奴らの群れだ！距離３００、数５０。やれるか？」

「任せろ！作戦は？」

「距離１００まで接近！そのあと秋名が牽制射撃を俺達は秋名の援護に回る！いいか？」

「任せとけ！何としてもここを突破するぞ！」

第３０話　３月２２日　午前９時３０分　土坂ビル前

「隊長！何で俺がミーシャと組まなきゃならないんですか！」

飛竜の奴、朝からずっとあの調子だ。
なぜこんな事になったかって？その理由はただ一つ、零次が飛竜とミーシャを組ませたからだ。

２時間前

「これから二手に分かれて土坂ビルの捜索を行う。チームαは俺と錬次、βはミーシャと飛竜、任務内容はαは地下階の安全確保。βはこの紙に書いてある。」

零次が紙を渡す。
俺は紙に目を通した。そこには要救助者の救助、及び敵の掃討と書いてあった。解りやすく言えば敵を潰して生存者の安全を確保ってことだ。

「よし何も意義はないな。」

「隊長！意義大有りですよ！なんで俺がミーシャ何かと組まないといけないんですか？」
また隊長はこいつと俺を組ませる気か？正直あいつと組むのはもう二度と嫌だ！

「ああそいつは戦闘スタイルの都合上、お前らが一番相性がいいか

らだ。」
確か飛龍の戦闘スタイルは前衛での攻撃、ミーシャの戦闘スタイルも前衛、そして屋内での戦闘ならこの組み合わせは、反則級の強さだ。
それにこの二人を組ませると面白いことになりそうだからな。
「あら飛竜、私じゃ不満なの？」
全く、本当に飛竜は私と組むとなるとこうよくも文句を言うわよね。
「そうじゃなく、お前と組むと生きた心地がしないんだ！昨日の戦闘でよくわかった。」
ミーシャの奴、俺に恨みでもあるのか？いや、恨みどころか絶対いつか俺を殺す気だよな。

……

「もういいだろ飛竜。これは決定事項だ。もしこれ以上嫌というのならばお前の部屋にあるフィギュアを全部海に捨てたっていいんだぞ。」
飛竜のやつ、ガチでミーシャのことが苦手なんだな。
「チッ、わかりましたよ隊長。今回だけですよ。」
「ならば早速乗り込むわよ。」

3月22日　午前10時　土坂ビル　一階　食料品売り場

「うげっ、こいつもう腐ってきてやがる。それに生物だから臭いもきつい。」
魚とかって一日放置したら腐ったけ？、いや現に腐っているか、まさか電気が使えなくなると1日でこんな状態になるとはな。

「そんなことより飛竜、もしかしたら上の階にヤバイのがいるかも、恐らく奴らなんかの比じゃないわ。」

「何だと、上の方にいるのは生存者じゃないのか？」
残念なことにミーシャのカンはよく当たる。アイツが奴らの比じゃないって言ってるなら恐らく相当やばいのだろう。

「恐らく全員そいつらに喰われたわ。」

「なっ！」
マジかよ。そんなことって。

「どうやら話し合っている暇は無さそうだわ。ほら、前、来たわよ。」
やっぱりね、こんな状況だもの、何も敵が奴らだけってことにはならないわよね。

「チッ、嘘だろ。」
俺の前にいたのは奴らなんて生易しいものじゃなかった。

第３１話　３月２２日　午前１０時１０分　土坂ビル　１階　食料品売り場

「何だありゃ……、奴らじゃないのは確かだが……。」
俺の前には化け物がいた、もちろん奴らじゃない。だが危険度は奴らよりはるかに高そうだ。

「さしずめアイ・アム・レジェンドに出てきたダークシーカーってところね。まあ、まだ一体だから何とか出来るけど、群れたらヤバイわ。」
まあ、こんな展開だろうと思ったわ。何せ変異体が出てるくらいだもの、このくらいの奴が出てこないほうがおかしいわ。

そうこう言っている間にダークシーカーが襲いかかってくる。

「飛竜！伏せて！」
「クッ……。」

俺が伏せた瞬間ミーシャのＭ１０が火を吹いた。放たれた弾丸は確実に敵を捉えた。

「殺ったか！」

「いえ、まだよ！さっきの攻撃ぐらいじゃ足止めぐらいにしかならないわ！」
やっぱりね、この銃は対人用としては最小限の威力しか持っていないわ。やっぱり映画と同じでこいつを倒すにはやっぱりある程度威力のある銃が必要だわ。

「解ってる！こいつで奴を撃てってことだな！」

俺はＳＰＡＳを構えた。そして……、

「バァァン！」「バァァン！」

銃声が響いた。

そして俺が放った銃弾はダークシーカーの腕を引きちぎり、顔を吹き飛ばした。だがこれだけ強力な弾を使っても弾が当たっていない部分はまだ原型を留めている。

「スラッグ弾を使っても体が吹き飛ばないとはな……。」

正直驚いた。変異体ならまだしも人の原型を留めている奴でこの耐久力とはな……。

「変異体並みの耐久力ね、正直私のもっている武器だとかなり苦戦するわ。」

参ったわね。どこかで武器を調達しないと……。

「なあ、ミーシャ単刀直入に聞く、このビルにあと何体ダークシーカーが入るんだ。」

ここは俺としてはかなり気に入らないがこの際はやむを得ん。ミーシャを頼るとしよう。

「多くて後１０体前後、少なくてもあと４体は居るわ。」

「そんなに居るのか……。何処に何体居るか分かるか？」

「詳しくは解らないけどだいたいなら解るわ。多分ほとんどが上にいるわ。でも下の方にも何体かいるわ、恐らく錬次達はまだ気付いていないはずよ。」

まあ、あの二人ならおおよそ問題はないはずね。なんせ錬次は私を倒した程だし、あの隊長に至ってはかなりの化け物だわ。

それにあの隊長、絶対只ものじゃない……、私がこの部隊を襲うためにビルの上に隠れていたときもただ一人私の存在に気づいていた。多分今私があの隊長と戦っても3分と持たないわ。私の見た限りだと恐らく第2世代とも対等に戦える程の強さね。

「マジかよ！今すぐ行くぞ！ああ、あとミーシャこいつを持っとけ！」

俺は背中に掛けておいたグレネードランチャーを渡す。

「ええ、せいぜい大切に持って置く事にするわ。」

助かったわ、正直あの銃だけだったら弾が持たなかったことだしね。

その後俺たちは急いで地下に降りた。

「どうやらここも食料品売り場だったのね。でもこっちはいろいろな高級品を取り扱っているみたい。」

普通なら女子にとってこんな嬉しいところはないわね。でも今は一番嬉しくない場所ね。

地下街は正直不利ね。上以上に視界が悪いしおまけに音も響く。その点奴らは視力を失っている分このハンデがないわ。

「ああ、だが今は感心してる暇は無さそうだなお前の見立て通りダークシーカーがこの階に居る。絶対に気を抜くなよ。」

恐らくは3体程度か……。とにかく先手を取れば何とかなるだろう。

第３１話　３月２２日　午前９時５０分　土坂ビル　地下１階　食料品売り場

「零次、こんな場所に生存者が居るのか？俺的には上の方が生存率は高いと思うんだが。」

「俺にも解らんが恐らく生存者がいるとしたら地下か上の方だろう。」

まあ、実際錬次の行っていることは正しいけどな。確かに生き残れる確率が高いのは奴らが侵入してきてもある程度時間的猶予がある上の方だ。だが地下も地下で生き残れる場所は以外にある。確かこのビルの地下には地下街に繋がる道があるはずだ。それにそういった地下街には大体……。

そう、俺が地下に生存者がいると踏んでいたのはそういった地下街にある、とある場所だ。

「だったら上の方を重点的に探せば良かったんじゃねえか？第一停電している地下街に乗り込むなんて危険が多すぎるぜ。」

零次の奴、時々訳がわからない事いいやがるぜ。今回の任務の中に人命救助って命令は確かにあるけどそれでもこんなリスクを伴うことしなくてもいいはずだろ。

「だから安全な方にあの二人を送り込んだろ。それに錬次、俺が人命救助の為だけにここに来てると思ってんのか？」

俺だってタダでこんな場所に来るような人間じゃない、目的は勿論食料の確保だ。いくら俺たちでも食料が無くなれば動けない。それに俺たちがもってきた食料は３日分しかない。第一こんな任務を請

け負った時点で俺達が3日以内に帰れる保証はどこにもない。ならば食料はあるだけ有ったほうがいい。

「だろうな、お前のことだ。どうせまたなんか企んでいるんだろう。だけど俺の考えが正しかったんならその要件は1階だけで事足りたんじゃないか？」

大方こいつの事だ。きっと食料でも探しに来たんだろう。

だが俺にはどうしても引っかかることがあった。もし零次の目的が食料なら1階で確保したほうが断然いいはずだ。さっき見たがここに陳列されている食料はほとんどが生ものだ。ろくに冷蔵もされていない環境なら1日と立たずに腐るはずだ。それに対して1階には缶詰とかが沢山あった。どう見ても1階で探したほうが安全じゃねえか。

「まあ、そう言われたら何も言い返せないんだがな。でもあの階にはアルコールの強い酒がなかったからな。あいつがあるとかなり便利なんだよ。」

勿論飲酒なんてしない。だったらなぜ必要か、それは武器になるからだ。酒に含まれているアルコールは引火性がある。無論普通の酒程度なら引火の心配は無いが７０％を超えるアルコール度数の酒ともなれば使い方一つで火炎瓶にもなる。

「お前、まさか火炎瓶でも作ろうってのか！」

こいつまた頭の中の悪い虫が疼きやがって、まあ、悪くはない考えだな。

実際、火炎瓶とか火が出る武器は奴らに対してもかなり有効だ。恐らく変異体にも確実なダメージを与えられるだろう。それにさすがの変異体でも細胞を焼き尽くされては動くことができないだろう。

「まあな、火炎瓶は対奴ら戦ではかなり有効な武器だからな。持っておいて損はないだろう。」
それにいざとなればダイナマイトの変わりにもなるだろう。

「それなら零次、さっさと行くとするか。確か酒売り場はこの先の地下街に続く道のすぐ近くだ。」

「ああ、急ぐぞ！」
これで段取りはできたな。まずは酒の確保、そのあとは、地下街の非常避難場所から食料を頂戴してついでに生存者の捜索。プランは完璧だ！

第３２話　３月２２日　午前９時５５分　光坂地下ストリート

さて、ここなら目的の物が置いているはずだ。
「錬次、奴らに警戒しつつ片っ端から漁ってくれ。」
とりあえずは何事も無く着いたな。まあ、なぜここの階だけ奴らがこんなに少ないかが引っかかるな。まあ、敵は少ないなら少ないほうがいいか。
「ああ、分かった。そっちの方の見張りは頼んだぞ。」
確かアルコール度数７０％以上の酒だよな。しかし本当に酒で大丈夫なのか？

地下の酒品店

「おっ、早速見っけたぜ。」
どれどれ、えーっと、スピリタスだって。ん？スピリタスって確か俺の知ってる中だと世界一アルコール度数の高い酒だったよな。
ラベルを確認してみる。そこにはアルコール度数９２％と火気厳禁の表示があった。
おいおい、こんなもん売ってもいいのかよ……、こりゃどう見ても純粋なアルコールだぜ。
飛竜だったら一口で酔いつぶれるな。面白そうだし今度飲ませてみるか。
そのあと１５分で俺が見つけた成果はこれだ。

スピリタス　４本（酒　アルコール度数９２％）
ウオッカ　５本（酒　アルコール度数６０％）
エストニア　２本（酒　アルコール度数９８％）ちなみに３５年物の高級品

正直おかしいだろコレ、この酒品店の店主はアルコール度数が高い酒博覧会でも開く気か、それにアルコール度数９８％の酒なんてもはや危険物の類だろ、ここ地下だぞ。危ねえよ！

「どうだ錬次、何かあったか？」

「何かありすぎだ、危険物が出てきたぞ！」
ここの店、イカれてやがる。なんてもん扱ってやがるんだ。

「何だ、機関銃でも出てきたのか？それとも対物ライフルか？」

「いや、状況次第ではミサイル並みに恐ろしい代物だ。」
俺は零次にエストニアを投げ渡す。

「なんだこいつは、ただの酒じゃないか？一体こいつの何処が危険物なんだ？」
俺は大したことはないと思いつつ、裏の表示に目をやった。

ア…、アルコール度数９８％だとぉ！こりゃ火炎瓶には最適だな。
しかしこんな代物が一般に流通してていいのか？

まあ、こんだけ強けりゃ威力は申し分なさそうだな。だけど地下で使うとなるとかなり度胸がいるな。

「とりあえずこんだけありゃ大丈夫か？」

これでダメとか言ったら殴ってやる。というかこれより強いアルコールはそうそうないだろう。

「ああ、こんだけ強けりゃ問題はない。ウオッカは一本消毒用に回してくれ。あとは全部火炎瓶にしちまっていいぞ。」

とりあえず予想以上の成果だな。あとはこのまま地下街に出てそのあとにどこかにある避難場所の食料を掻払う。ついでに人がいれば救助だな。

だが、この作戦にもひとつだけ落とし穴があるんだよな。

つまり、余りにも今までがうまくいきすぎてるんだよ。それにこのあと地下街に出で変異体と遭遇する確率も無きにしも有らずだし。

それに万が一変異体と遭遇したら分がなさ過ぎる。この先の地下街は今まで以上に視界が悪いしおまけに電気も止まってる。だが最も厄介なのは音が良く響くってところだ。奴らは音の寄ってくる。もし俺たちが変異体とドンパチやらかしたらその音に釣られてこのビルに入る奴らが全部寄ってくる。

それだけは何としても避けねば……。

「零次、何ボーっとしてんだ。もう全部火炎瓶にしちまったぜ。もしかして死亡フラグでも立てていたのか？そんなもん立てていたってなんの得にもならないぞ。」

こいつの計画は完璧だけどたまに落とし穴があるからな。大方こいつがさっきぼーっとしてたのも計画の落とし穴に気が付いたからだ

ろう。

「ああ、いや何でもない。とりあえず早いとこ地下街に出よう。」

落とし穴に落ちないようにするには早いとこ任務を完了して地下から脱出するしかないか。

午前１０時００分　商業地区　地下ストリート　北エリア

「ひどいな、何処も死体だらけだ。まるで南部の戦場のようだ。」

慣れているとはいえこいつはやっぱり堪えるな。まあ、人間の惨殺体を見ていい気分になる奴なんてよほど正気じゃない奴だけか……。

「俺はあの時の教団の内部の様だと思ったけどな。いや、そう考えたらまだこっちの方がマシか……。」

教団はこれ以上の惨さだった。何故か、非検体が子供だったからだ。今思い出しても全くいい気分にはならない。

地下ストリート、まさかここまでの惨状だとはな。

床には喰われた死体が散乱し血がありとあらゆる所を濡らしている。死体は喰われ方が酷く性別の判別は勿論、酷い奴は人かどうかもわからない。恐らくパニックを起こしている時にこの地下ストリートに奴らが溢れたんだろう。

「まあ、今はそんな事はどうでもいい。さっさと片付けるぞ。」

第３２話　３月２２日　午前１０時００分　光坂地下ストリート（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年こそ小説完結を目指していこうと思っています。

第３２話　３月２２日　午前１０時００分　光坂地下ストリート

「零次、お前の言っていた地下の避難所ってのは多分ここじゃないのか。」

案内図を見るとこの先を少し進んだところに避難所のマークがあった。見た感じこの場所ならそこまで避難民が殺到したという形跡はないだろう。

「ああ、多分あそこだな。確か避難所だけあって扉は頑丈なはずだ。もしかしたらまだ耐えているかもしれん。急ごう。」

ストリート中心区

「錬次、今の見たか。奴らが奴らを食っていたぞ。」

何だありゃ、見た目も普通の奴らとは少し違ったぞ。もしかして変異体か？

だとしたらかなりヤバイな、ただでさえこっちは視界が悪いんだ。こんな状況で襲われたらひとたまりもないぞ。

「ああ、勿論だ。何なんだありゃ、とりあえず奴ら以上にヤバイのは解るんだが……。」

「ああ、かなりヤバそうだ。気づかれないうちにさっさと行くか。」

マズイな、見たところ3体、これが奴らだけだったら大したことないが相手の正体がわからない以上迂闊に手が出せない。

それに何かマズそうだ。特に身体能力とか。

「錬次、何している、気づかれないうちに早く行くぞ。」
もうすぐだったはずだな、確かこの先を曲がった行き止まりに扉があるはずだ。

「いや、マズイな零次。どうやら気づかれたらしい。」
敵がこっちに向かって来ている。しかも猛スピードでだ、こいつは正直言って詰んだかもしれないな。

そう思っている間にも敵は近づいてきている。その姿は飛竜達を襲ったダークシーカーそのものだ。但し、今迫ってきているのは単体ではなく4，5匹の群れだ。もしこれが屋外ならまだ何とかなるかもしれないが生憎ここは屋内、おまけに視界もかなり悪い。

「チッ、しょうがない。錬次、弾はまだあるな。迎え撃つぞ！」
チッ、分が悪いけど殺るしかないか……。殺らなきゃ殺られる。今の世界の鉄の掟だ。

俺は右手にナイフ、左手に拳銃を構えた。
これが俺の近接戦闘スタイルだ。ナイフで敵の攻撃をいなし、敵がバランスを崩した所を拳銃で的確に撃つ。少し変なスタイルだが俺にはこれが一番しっくり来る。

「ああ、まだあるぜ。でもＡＫを敵に来れてやるのは勿体ないな。俺はコイツで行くぜ。」

俺も両手にスコーピオンを構えた。

「ＡＫは使わないのか。」

「ああ、こいつだけで十分だ。」

第３２話　３月２２日　午前１０時００分　光坂地下ストリート（後書き）

突然ですが新しい小説を書き始めました。
暇なときなどに目を通していただくとありがたいです。

第３２話　３月２２日　午前１０時０５分　光坂地下ストリート

「零次！そっちに二体行ったぞ！」

二人にダークシーカーが襲いかかる。数は3体、その内一体が俺に二体が零次に向かった行った。だがこの程度、南部の地獄を生き抜いた俺たちにとっては何とでもない。

俺も銃を構え応戦を開始する。しかし俺の持っているスコーピオン程度ではあまり効いていない様子だ。

「チッ、やっぱりこいつだとあまり効かないか。まあ、でも怯ませることぐらいは出来るか……。」

錬次がダークシーカーの攻撃を間一髪で躱す。無論、躱すタイミングが０．１秒でも遅かったら攻撃をモロに受けるか、もしかわせても致命傷は避けられない。だが彼の表情には余裕があった。

「オラッ！」

攻撃を躱すとすぐに錬次のスコーピオンが火を噴く。その弾道は腕を狙っていた。

錬次が放った弾はダークシーカーの腕に刺さりダークシーカーが呻きが声を上げる。

「ほっらよっと。」

銃弾を受けた方の手ではさすがに攻撃はしてこなかったがそれでもダークシーカーは残っている腕で錬次の殴りかかる。しかし錬次は

その攻撃をひらりと躱し残っている方の腕を狙ってスコーピオンを放った。

「錬次！そっちの方は大丈夫か？何なら加勢してやってもいいぞ。」

零次が錬次に声をかける。勿論ダークシーカー二体と戦いながらだ。しかも話しながら戦っているというのに確実にダークシーカーを追い詰めている。

「いいや、こっちは大丈夫だ！こいつ1体ぐらいなら俺一人でも何とかなる。うおっ！危ねえ！」

クソッ！零次の奴、俺はお前と違って戦闘中に話すなんて技はもってないんだよ！

相変わらずの怪物ぶりだな、零次の奴。流石は南部戦線で自衛隊を恐怖のドン底に落とした野郎だ。

錬次の顔をダークシーカーの腕が掠った。あと一歩躱すのが遅かったら正面から攻撃を受けていたことだろう。

「まあ、錬次なら心配ないか。フン、今度は二体同時か。」

「「キィーン！」」「「バァァン！」」

零次は右手のナイフで片方のダークシーカーの攻撃を弾き、左手に構えた拳銃でもう片方のダークシーカーの頭を撃った。

「まずは1体」

頭を打たれた方のダークシーカーは弾丸が脳まで達したのか、ピクピクと2、3回痙攣した後動かなくなった。

「そらっよっと！」

そして零次は再び襲いかかって来たダークシーカーの脳天をナイフで刺し、更に噛み付かれぬよう素早く腹を蹴り上げた。蹴り上げられたダークシーカは宙を舞い、そしてその死体は錬次が戦っているダークシーカの頭上に降った。

「うあっ！何だ？何か降ってきたぞ。だが……。」

しめたぜ。これで終わりだ！

錬次は両手にスコーピオンを構えダークシーカの頭目掛けてマガジンにある弾丸を全て吐き出した。
そして吐き出された弾丸はダークシーカーを肉塊へと変えていった。

「ハァハァ…、これで終わったのか……。」
さすがに化け物とやり合うのはキツかったな。それにこいつ、パワーが異常だ。もしかして変異体の類か？

「何だ錬次、もう息が上がってんのか？」

そこには息一つ上がっていない零次の姿があった。

マジかよ……。零次のやつ、しかも2体同時にあんな化け物と殺りあって息一つ上がっていないだと……。駄目だ。最近零次の野郎が変異体に見えてきた……。いやマジてこいつ変異体だろ。

「相変わらずの化け物ぶりだな……。流石は南部戦争で狂人と呼ばれただけはあるな。」

「いや、お前も1体とはいえダークシーカーに勝ったんだ。やっぱり南部で帝国軍を翻弄しまくっただけはあるな。」

いや……、あんたみたいな正真正銘の化け物に言われても嬉しくないです。

「さて、邪魔者は排除した。さっさと避難所に行くぞ。」

無駄な手間を掛けさせやがって。後生のお願いだから階段に奴らが溢れているのだけは勘弁してくれよ。

零次が走り出す。

「オイオイ、勘弁してくれよ。」

「早くしないと置いてくぞ。こんなのまだ軽い運動にしかならないだろ。」

こいつ、疲れを知らないのか?休まないといざって時に困るだろ…

…。ってもう行っちまったし！

午前１０時１０分　光坂市地下ストリート　有事緊急避難場所

「なんだこりゃ？扉が……。」

俺は目を疑った。何故かって、そいつは扉に巨大な穴が空いているからだ。今まで何度も扉を破ったりしてきたが。俺の経験上この厚さの扉をこんな風に破るなんて不可能だ。

「ハァ…ハァ……。零次！俺を置いていくなよな！ってなんだよこれ！」

俺の目に穴のあいた鉄扉が写った。

何だこれ、もしかしてさっきの奴らが……。

いや、待てよ。確かにダークシーカーは化け物だったが流石にここまでの力は持っていないはずだ。ならば奴らが…。いや、その線もないもしこの扉に穴を開けたんなら今頃この辺は奴らで溢れかえっているはずだ。

「錬次、ＡＫはあるか。」

「なんだ、いきなり……。」

「この奥に変異体がいるかもしれない……。」

まあ、これが結論だよな。こんな真似ができるのは。変異体だけ、それが一番真っ当な考えだ。

「何だと……、分かった。」

嘘だろ…、さっきダークシーカーと戦ったばかりなのに……。こいつは本格的にマズイな。

そう思いつつ俺はＡＫを構えた。

第３２話　３月２２日　午前１０時１０分　光坂地下ストリート（前書き）

（祝！３万アクセス！）

どうも、黄竜です。お陰様で３万アクセスを迎えることができました。

ただいまこれにちなんだ企画を考えいます。詳細は後ほど……。

第３２話　３月２２日　午前１０時１０分　光坂地下ストリート

「こいつは酷いな。まるでコナミが作った某ホラーゲームの様だ。」

「ああ、まるでサイレントヒルだ。でもこっちの方がリアリティがあるけどな。」

まあ、リアリティとか言ったが一応現実だからな。

倉庫の中は零次の予想通り、人は居たが既に死んでいた。恐らくあの扉を破った奴が犯人だろう。
遺体はかなり惨い喰われ方をしていた。内蔵を抉り取られた遺体、体の半分を食われた遺体、下半身がない遺体。どれも１８禁級の物ばかりだ。

「ところで零次、肝心の変異体は何処なんだ？一通り探したが変異体どころか奴ら一匹見当たらないぞ。」

もしここを襲ったのが扉に穴を開けた奴だったらまだここに居るはずだ。もしどこかへ移動したのならさっきの戦闘中に間違いなく姿を現すはずだ。
奴らは音に反応する。それはたとえ変異体だろうと変わらないはずだ。

「ああ、俺もそう思ったところだ。なあ錬次、お前はこいつをどう見る？」

恐らく変異体はここから抜け出してどっかに行ったんだな

錬次が地面を指さす。そこには人の死体があった。

「普通の死体じゃないのか？いや、待てよ。零次、この死体の傷、普通じゃないよな。それに肩の辺りに噛まれた跡がある。もしかして……」

でもさっきの鉄扉には奴らが群がった形跡はなかった。ならこいつは……。

「答えは向こう側の壁だ。よく見てみろ。」

「なっ、なんだよこれ！」

俺はまた目を疑った。そこには大穴があいていた。その穴は既に崩れた岩で塞がれているが

もしこの穴が塞がれていなくてストリートに繋がっているとしたら奴らが来る可能性は十分に有り得る。

「これで解ったろ。あの穴を開けた犯人が。」

「ああ、変異体だな。それもかなりデカイ奴だ。」

これは俺の勝手な予想だが恐らく形はミミズのような形で全長はは穴の大きさから推定するに４ｍから５ｍ弱、穴は口で開けた筈だ。

「もしかしたらまだすぐそこに居るかもしれないぞ。俺の読みが正しければそいつは地中を移動できるはずだ。」

俺に足元には何者かが穴を開けた形跡があった。大きさはそこまで

大きくない。だがこいつは本体ではないはずだ。恐らくここを襲った変異体の体内にいた奴だろう。だがそこまで大きくない分移動能力も低いはずだ。つまりボスは来なくとも変異体（小さいが数は多い）と戦うことはどうやら避けられなさそうだ。

「何だと！」

嘘だろ。

さすがに変異体＋αは二人だけだとキツ過ぎるぞ。せめて４人でパーティを組ませてくれ、そうでなかったら戦車を使わせてくれ。

「ほら、どうやら見つかったみたいだぜ。」

錬次がそう言った途端、地面がグラグラと揺れ、数体の変異体が現れた。大きさは２m弱、形はまるで芋虫だ。

数は７体。零次をもってしてもかなり厳しい状態だ。

「おい、いくら何でも数が多すぎないか？いくら変異体の中じゃ弱い部類でもこの数だど押し切られるぞ。」

「零次！そんなことをほざいている暇があったらとにかく１体でも多く敵を潰すんだ！早くしないともっとでかいやつが来るかもしれない！」

恐らくこいつらのボスも地中を移動できる、そしてそのボスは鉄の壁に大穴を開けるバケモノだ。多分今の俺達の装備だと倒すのは無理だろう。それに

このとき俺の頭の中に（変異体の取り巻き）＋（こいつらのボス）＝確実な死。と言う計算式が出てきたのは言うまでもない。

「なんだって！錬次、今度からそういう事は先に行ってくれ。」

クソッ、これ以上の戦闘をしたら弾薬が持たないな。だが、撃たなかったら死ぬだけだ！選択肢はただ一つ、ただ撃つのみ！

「零次！後ろだ！左右から2体来てるぞ！」

「チッ、クソッ……。」

……駄目だ…間に合わない……。これまでか……。

零次の後ろには2体の変異体が零次を襲おうと迫っていた。無論左右から攻められればいくら零次といえど1体は倒せてももう一体を倒すというのは奴らなら可能かもしれないが変異体が相手では不可能だ。

零次が襲われるのを覚悟した直後……。

「ダァン！」「ダァン！」「ダァァーン！」

後ろから銃声が響いた。その正体は錬次が放ったオート9の3点バースト射撃だ。その弾は2体の変異体の急所を確実に射抜いていた。撃ち抜けれた変異体の内1体は絶命し、もう1体も急所に弾が当りもがいていた。

「錬次、助かったぜ。今回ばかりは死を覚悟したぞ。」

「謝っている暇があったらさっさと残りを始末するぞ！」

「ああ、わかったぜ！」

３月２２日　午前１０時１５分　地下ストリート　入口

「ミーシャ！隊長達はどこに行ったか解るか？」

「銃声がした場所から考えて多分こっちの方ね。それに急いだほうがいいわ。」

さっきの銃声の数だと恐らく錬次達はフルオートで撃っているわ。残りの残弾から考えてもあの調子だとそこまで長く持たないわ。

「ああそんな事言われなくても分かっている。急ぐぞ。」

俺達は銃声のした方へ全速力で走った。途中までは奴ら倒されており、かなりのペースで走れたが……。

「飛竜！奴らの群れよ！それもかなりの大群。どうする？これで一掃する？」

ミーシャがグレネードランチャーを構えた。

「ああ、頼んだ。一体残らず吹き飛ばせ！」

「分かったわ！」

ミーシャの持つグレネードランチャーが火を吹いた。その弾は奴らの群れの中央付近で炸裂し辺り一帯を火の海に変えた。

「行くぞ！」

「勿論よ！ここを超えたら錬次達の所まではすぐに着くわ！」

３月２２日　午前１０時２０分　地下ストリート

「ハァ…ハァ…。錬次、噛まれてはいないな。」

俺達はあのあと更に来た変異体３体と戦い何とかギリギリのところで押し切った。だが俺も錬次も既に連戦で満身創痍だ。恐らく今度変異体が来たら確実にどちらかは死ぬだろう。

「ああ、勿論噛まれてなんかいねーよ。このとおりピンピンしてるぜ。」

さすがに２連戦はキツかったな。それに残弾もあまり余裕がない。俺としても３連戦は避けたいな、いや３連戦はどうやっても無理か……。

「それにしても零次。変異体つってもいろんな奴がいるんだな。てっきり俺は変異体ってのは人型のものだけだと思っていたんだが……。」

「変異体が人型だけじゃないなんて事ぐらい分かるだろ。普通は。」

馬鹿だろこいつ。バイオハザードとかサイレントヒルとかでも人型

以外の敵が出てるだろ。

「まあ、普通はそうだな。」

この時の俺は3戦目はないと踏んでいた。しかし、最悪の敵はすぐ近くにいた。

「錬次、何か変な音がしないか？」

「いや別に……、クッ、零次！下からだ！今すぐそこから離れろ！」

嘘だろ……。冗談キツいぜ、まさか本当に3戦目に突入なんてよ！ふざけんな！

「嘘だろ！なっ……。」

零次かその場から離れた瞬間、巨大な変異体が現れた。恐らく形から推測するにさっきの奴らの親玉だがその大きさは軽く5mを超えていた。それに気持ち悪さも倍増だ。

「何だよこいつ……。とんでもなくヤバそうだ。零次、俺達2人での勝算はどれぐらいある？」

よりにもよってさっきの奴らの親玉かよ。こりゃ本気で死を覚悟しないとな。

「良くて5割、悪かったら全滅だ。」

もしもこれが連戦前だったら勝率は大きく変わっただろう。多分負

けることはないはずだ。だがこの連戦のあとだ。お互いに体力はかなり消耗している。多分このまま戦えば勝率はかなり低い。

「そりゃかなりヤバイな。だけど錬次、何か忘れていないか？」

多分こいつが予想した勝率はあの二人が居ない上での勝率だろう。おそらくあの二人は確実に応援に駆けつける。なんだってさっきフルオートで銃を撃ちまくったんだ。それが何を意味するかはおそらく二人にもわかったはずだ。

「そうよ零次。アンタは大事な可能性を考えていないわ。」

「まさか……。」

「ああ、その通りだ。伏せといたほうがいいぜ零次。怪我したくなければな。」

「分かった。」

零次が伏せた途端、変異体に何かが当たりそして爆発を起こした。

「あれは……。」

「来たか。」

「隊長！遅くなりました！これより2人で敵との戦闘を開始するので援護お願いします！」

なんとか間に合ったみたいだな。

「錬次！援護は任せたわ！」

なんとか間に合ったみたいね。多分本当にギリギリのとこだったわ。

「お前たち、なんでこの場所がわかったんだ？」

「そりゃあんだけ派手にやらかしたんだ。居場所ぐらい分かるだろ。それより零次、これで勝率はかなり上がったんじゃないか？」

「ああ、少なくとも５割は上がったぜ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9517r/

学園黙示録 意思を継ぐ者

2012年1月12日03時48分発行